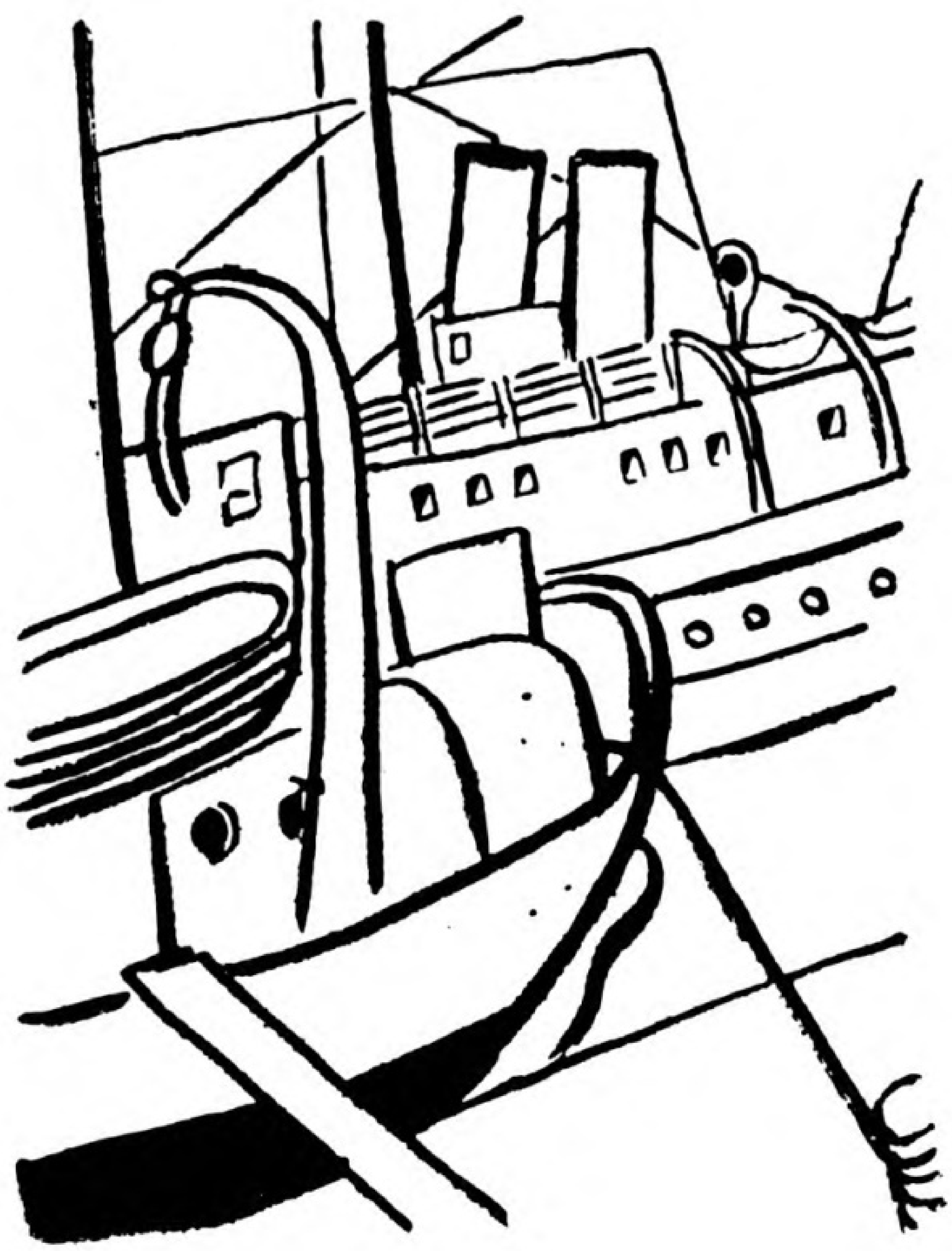
大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可 （毎月一回一日發行）　昭和四年十二月二十八日印刷納本 昭和五年一月一日發行　第八卷第一號

婦人運動

一月號



第8卷　第1號

職業婦人社發行

好評重版

奈良女高師教授兼附屬幼稚園主事 森川正雄先生序
家なき幼稚園長 橋詰良一先生著
▲大阪毎日新聞社相談役
▲家なき幼稚園創設者

家なき幼稚園の主張と實際

四六版三百數十頁
寫眞挿畫數十入
定價二圓五十錢
送料十六錢

△創設者の苦心披瀝
△世界的大教育事業
△六つの家なき幼稚園

先づ露天に於ける家なき幼稚園を創設し次に自動車に及び電車に進みし實況を披瀝さる。バーカスト女史は此教育的御創案を見て世界的一大創案として驚嘆措く所を知らなかった。現に御經營の六幼稚園の實際を悉く詳記して天下此種の幼稚園經營者の參考に供さる。

六版

奈良女高師教授附屬幼稚園主事 森川正雄先生著

幼稚園の理論及實際

定價金三圓 送料十六錢

▲唯一の邦文參考書 本邦唯一人の勅任主事森川先生の力作にて理論及實際を平易に體系的に說かる。
▲幼稚園の經營原論 內容は古今の理論、內外の實際等幼稚園經營の諸問題を網羅し悉く之を解決指示する。
▲保姆檢定の參考書 本書は奈良女高師本科保姆科の教科書にて福岡縣初め各府縣の指定參考書。

五版

奈良女高師教授附屬幼稚園主事 森川正雄先生著

保姆用 教育學

定價二圓八十錢 送料十六錢

▲保姆檢定唯一の參考書 文部省當局と打合せ、新定の幼稚園令施行規則の教育、兒童心理、教授法、管理法を全部網羅した保姆受驗者の參考書、保姆養成所及び女子師範等の保姆及保姆志望者の唯一の教科書である。保姆の保育には姉妹篇「幼稚園の理論及實際」を、教育學には本書「保姆用教育學」を讀まれたい。

重版

奈良女高師教授附屬幼稚園主事 森川正雄先生著

幼稚園託兒所 育兒法

定價金二圓 送料十六錢

▲新幼稚園施行規則 による保姆に必要な幼稚園託兒所に於ける適切なる育兒法を詳述し盡さる。
▲本書も又天保檢定の必須參考書 保姆志望者並に保姆必須書。附錄には育兒上必要な諸法規を添ふ。

東京・大阪 東洋圖書株式合資會社 發行

（直接注文一手取扱）
東京市神田區錦町三丁目九・東京振替一〇三七番
大阪市南區安堂寺町一丁目・大阪振替三九五五六番

謹賀新年

日本女子大學校
麻生正藏
（小石川區目白）

社會立法協會
淺利順四郎
（芝區協調會館內）

國際聯盟協會
靑木節一

產業組合中央會
千石興太郎
（牛込區揚場町）

產業組合中央會
濱田道之助
（牛込區揚場町）

全國購買組合聯合會
傳田政治
（牛込區揚場町）

產業組合東京支會
橋本律二
（丸ノ內東京府廳內）

「婦人サロン」社
菊池寛
（麹町區大阪ビル內）

「女人藝術」社
長谷川時雨
（牛込區左內町）

「婦人と生活」社
橘登美枝
（牛込區加賀町）

東京中央放送局
大澤豐子
（芝區愛宕山）

日本女子大學校
正田淑子
（小石川區目白）

家事研究會
開地敏子
（芝區西久保櫻川町）

婦人タイプ社
石川琴子
（神田區一ッ橋通）

謹賀新年

鈴木商店
鈴木小松
（丸ノ内帝國ビル内）

日本女子美髪學校
古田梅子
（神田區表猿樂町二）

小口美容研究所
小口みち子
（京橋區南傳馬町）

消費組合協會
賀川豊彦
（大阪市中區江戸堀）

關東消費組合聯盟
岡本利吉
（市外大島町二丁目）

消費組合聯合會
廣田金一
（小石川區諏訪町）

中ノ郷質庫信用組合
奥堂定藏
（本所區松倉町二丁目）

「經濟知識」社
後藤登喜男
（丸ノ内丸ビル三階）

「愛兒と女性」社
島原榮介
（芝區芝公園五號地）

（家の光）編輯部
有元英二
（牛込區揚場町産業組合中央會內）

マツダ助成會
池山薫
（京橋區鍋町ビル）

日本女子薬劑師會
草野さつ子
（麹町區土手三番町）

日向堂
眞杉靜枝
（神田區表猿樂町二）

「糸の友」編輯部
谷名糸子
（京橋區疊町片倉ビル內）

謹賀新年

東京府職業紹介所
豐原又男
（麹町區飯田町）

東京市中央職業紹介所
久保隆三
（神田區神田橋際）

日本廣告クラブ
荒木丈太郎
（京橋區スキヤ橋際）

眞琴商會（エス・エム染料）
阪本眞琴
（市外大森不入斗七二六）

使徒行社産制相談部
野尻義與
（市外池袋一、一四三）

産兒調節相談所
小川隆四郎
（市外柏木一八九）

勞働者診療所
馬島僴
（本所區松倉町二）

謹賀新年

「婦女新聞」社
福島四郎
（市外淀橋角筈）

「教育週報」社
爲藤五郎
（市外西巣鴨二四〇一）

「綴方生活」編輯部
志垣寛
（神田區一ツ橋通文園社内）

「解放」社
山崎今朝彌
（芝區新櫻川町）

女子タイピスト學院
井上清哲
（神田區神田橋際）

中根式速記學校
中根正世
（麴町區九段ビル内）

女子タイピスト學校
西内省五
（神田區水道橋際）

日本タイピスト養成所
（京橋區南傳馬町一）

大谷タイピスト養成所
大谷タイプライター出張所内
東京驛前丸ビル一階

第八巻第一號　婦人運動（一月號目次）

童話

創作



春の訪れ

サロヂニ・ナイーヅ
清水乙女譯

子等よ、わが子等よ、またもや春は眼醒めて
晨も日中も呼びかける。
お前達の様な花とも見ゆる輕快な娘と
共に樂しく遊ばうと。

小山の上にも谷間にも、庭や木立の間から
あの様に美妙な頌歌が響いて、
うつとりとしま目白やめいなや鳩が
歡迎の歌を歌つてゐる。

サロヂニ・ナイーズは、タゴール翁と共に印度を代表する女流詩人である。タゴール翁が哲學的抒情詩人であるとしたなら彼女は、現實的宗教詩人だといつてよいと思はれる。その詩の本質が彼女をかり立つてガンヂと手を握らせ、ガンヂの後をついで政治戰線に立たせたものゝやうに思はれる。彼女は最初、印度の民謠をうたひ、續いてその現實と夢の美しさを歌ひ、最後に宗教的色彩を加へて行つた。

最初の詩集「金色の入口」（一九〇五年）が彼女の出世作であつた。これはシモンズの序文を飾つて出版された。その次に「時

私は知つてゐる。象牙百合
河菅に半ば隠れた小川に咲き亂れ
空は叢林や凹地や籬に
花咲く黄金で赤らんでゐる所を。

私は知つてゐる。蜻蛉がちら／＼と靜かに飛び
野生の孔雀の羽根が光り輝く所
狐や栗鼠や臆病な鹿が隠れ、
鷹や青鷺の臥して夢見る所を

大地は蜂雀の翼の様に
輝き大空はせみの羽根の様よ。
さあ、おいで皆一所に行つて
快活な子供等の様な春と共に遊びませう。

の島」を出し、最後の「破れたつばさ」（一九一七年）は、序文を何にもつけず、たゞ簡單に「今日の夢想、明日の希望」とデヂイケーションを述べてゐるだけである。

その後永い沈默ののち遂ひに印度のジャンヌ・ダークとして革命運動に投じたのであつた。彼女は現在アメリカ旅行中で、歸途日本に立寄ると期待されてゐる。ボンベイの市長に推された彼女、全印度國民協會の大會に副議長として活躍した彼女。

近來、詩がないのはかうした運動に專らなためであると思へばむしろ詩のないことに力を感ずる次第である。



一路消費組合運動へ

小川房夫

私等の生活は日増しに苦しくなつて行く許りです。昇給は止められる、賞與は減らされる。失業が私等の小さな家庭を脅かしてゐます。年は暮れ、年は明けても變らないのは、私等の生活の不安です。うすら寒い街頭を歩む私等の階級――勞働者とそして下級俸給生活者――は、主人も、妻も、いたいけな子供迄も輝かしさを失つてゐます。そして何よりも悪いことは、現代の經濟制度では、私等の階級は、何時まで經つても、私等の階級に留つてゐることです。私等は忍ぶことにしませう。併し、私等の愛する子、そして孫、それまでも私の階級に留まることは忍び得ないことです。私の目の前にぐんぐん延びて來る小さい芽生が、現代の社會に觸れた時に、私等と同樣に、充分延び切れずに、何時の間にかしぼんで了ふのかと思ふと心がかきむしられる樣に思へます。

私等自身の現實の生活、そして私等階級の次の時代の者の生活まで脅かさうとしてゐる現代の經濟制度――それを頑迷に維持して行かうとするのが教化總動員であり、消費節約宣傳なのです。日清戰爭時代の愛國思想に誰れが心を躍らすことが出來るのです。極度に切つめられた私等の生活に何處に節約が出來るのです。私等の臺所には其の日、其の日の糧さへ充分用意さ

れては居ない、私等の小さな戸棚には、夜の寒さを漸くしのぐ布團があるだけです。私等は夜毎狹苦しい室に、電燈臺を氣にしながら、人口稠密を笑草にして寢るのです。消費節約とは私等の生活を今より一層低下——それは生存點以下に——させて、不景氣の今日に於ても尙資本に對する利潤を維持して、資本の增大を計らうとする意圖に外ならないのです。

今日の經濟制度は、凡てが資本　爲に動いてゐます。資本の爲に奉仕してゐます。思想も、藝術も、科學も、勞働も。そこですばらしい資本の蓄積と、高度の文化が現出したのです。でも資本を持たない——そして永久に持てない——私等階級はそれには何等係りがないのです。資本も文化も資本家が獨占してゐるのです。私等は資本に奉仕して、資本をいやが上に增大させる爲に、又小數の人が文化を享樂する爲に、年が明けても、年が暮れても、奴隷の樣に働かねばならないのです。

如何して此うした生活が忍ばれませう。日々の生活のあへぎの間に現代の社會制度を深く見て行つた時に、家中が寢靜つた夜更に未來が輝かしく約束されてゐる樣な吾子の寢顏を見た時に如何して、じつとしてゐられませう。

私等階級は蹶起しました。それはほんとうに少數の人々に依つて、ではあるけれども。何に依つて？勞働組合、無產政黨、そして消費組合。此の三つに依つて、私等階級の前途が明るく照らし出され樣としてゐます。激しい資本の攻勢の前に、三つの私等の陣列は嚴然と敷かれてゐます。戰は敗れかけては、もち直し、もち直して、續けられ、私等階級の一步一步宛の勝利を示してゐます。

勞働組合、無產政黨、これは血みどろな戰があるにも拘らず、一面花々しい方面を持ちます。戰らしい戰が行はれます。爭議と云ひ選擧と云ひ、息づまる樣な瞬間を持ちます。從つて戰に關係がある人、ない人に拘らず、血を湧かせます。手に汗を握らせます。

併し消費組合にはそれがありませぬ。日常の地味な仕事です。今日の人々が餘り重要視しない臺所の仕事です。お米や、お味噌や、お醬油、それが二錢安いの、一錢高いのと云ふつまらない仕事です。それに永いこと私等階級の者は消費組合と云ふ言葉から、會社の廉賣店を連想することに慣されて來てます。私等勞働する階級の前途に輝かしい希望を與へるのだと云ふ樣

なことは知らないのです。從つて消費組合は、私等の生活から離れたものになつてゐたのです。でも今日ではもう私等は消費組合に對する考へが變つて來たのです。私等階級の前途の光明の爲に消費組合を始める樣になつたのです。

では何故消費組合は私等階級の爲になるのでせうか。私等日本の勞働する階級の開いてゐる場末の小賣商店にも劣つた店が、如何して、資本の壓迫に苦しんでゐる私等の生活に光明を與へることが出來るのでせうか。私等は、なけなしの金を出し合つて店を持ちます。そして製造元から品物を仕入れて來て、お互の間に分け合ひます。そこには少くとも問屋、仲買、小賣商人と云ふ人々から取られる利益が、私等の所に入つて來ます。その利益の一部は組合に積立て、一部は私等に配當されます。これが今日本にある消費組合なのです。併し消費組合が發達して來れば、組合に積立てられたお金が莫大なものになります。そして一つの組合でなく、日本國中の消費組合がその積立てたお金を集めれば、一つの工場を持てる樣になれます。その工場が作つた品物を、お互同志の組合が私等階級に配給するのです。

これは日本でこそやつてはゐませんが、英國、佛蘭西、獨逸、ロシヤ等歐洲の各國で現實にやつてゐることなのです。消費組合の發達した處では、私等階級は、自分等が作つた工場で働き、自分等の工場で作つた品物を臺所で使つてゐるのです。そして消費組合の店も、三越、白木の樣な店になり、そこには會堂もあり、クラブもあり、娛樂室も、讀書室もあり、集會所もあるのです。ほんとうの意味の私等階級の「家」が出來てゐるのです。英國消費組合の如き五百萬の組合員が居り、一年の賣上高も二十億圓に達してゐるのです。大戰前世界經濟の覇權を握つてゐた英國のことですから、大資本家の力には到底及ぶべくもありませんが、それでも消費組合に依つてこれだけの勢力を作りあげた英國の勞働階級の强味は、勞働組合や、勞働黨に當然反影しないではゐないのです。英國の勞働組合や勞働黨の現在の勢力は偶然なことではないのです。

私等は消費組合に就て更に別の見方をしませう。私等は何にも持ちません。持つてゐるものは唯勞働力許りです。それを賣つて、俸給とか賃銀に更へて漸く生活を續けてゐるのです。そして私等の唯一の財産である勞働力は、それを賣つて了へば、それから出來た生産物に對しては何等の發言權を持たないのです。如何なる價値があらうとそれは私等の何等に係りがないので

す。それの不合理さを知つた私等は勞働組合に依つて、自己の生産者の利益を主張してゐます。併し、一面貰つた賃銀なり、俸給なりも、これを私等の階級の利益の爲に使はねばならないのです。これをデパートメント・ストアで使ふか、消費組合で使ふかと云ふ問題が殘ります。此頃は百貨店は發達して、日常必需品のあらゆる部門に迄仕事を進め、小市民階級の小賣店の地盤を根こそぎ荒しつゝあります。大都市に於ける百貨店は、私等の階級に日々喰入つて來るのを痛切に感じます。百貨店には目覺めぬ私等階級の大衆を奪ふあらゆる手段が設けられてゐます。特價品、福引、演藝物、屋上庭園、食堂等々、そして壯麗な建物の中に渦卷く華美な近代主義の空氣に男も女もすつかり醉はされて了ひます。

だが私等が靜かに冷やかにこれを觀察すれば、百貨店には後に糸を操る大資本の黑い影を見るでせう。私等は生産者として資本に奉仕してゐる許りでなく、消費者としても完全に大資本に繰られて、虫取草の餌食になつてゐるのを知るでせう。私等はせめても消費者として獨立せねばならないのです。私等の血みどろの生活鬪爭に依つて得た賃銀や俸給の主人にならなければならないのです。私等は勞働力を賣る爲の場合には如何にもがいても資本に屈從せねばなりません。併し消費者として、即ち得た賃銀や俸給を使ふ側では或る自由さを持ちます。私等に殘された唯一の自由を完全に有効に使ふ樣にせねばならないのです。

消費組合こそはそれなのです。

自分で作つた店で買ふ。

これです。消費組合を育て上げて行つて、英國や其他の歐洲各國の勞働階級の樣に、大資本の手に引かれぬ大規模な百貨店を私等自身で持つ樣にならなければならないのです。消費組合で物を買ふことは私等の消費者としての獨立を計る道なのです。

私等は一路消費組合運動へ進まなければなりません。

お正月・祖父

田邊一子

お正月の思ひ出と言つても、私共のやうに年がな年中生活にばかり追はれてゐる者にとつては、樂しいとか嬉しいとかいふやうな事は殆んどなかつたかわりに、苦しかつた事や、辛かつた事など、いつまでも色濃く心に刻みつけられたまま殘つてゐるのが多い。それも親がかりのうちは凡そに過ごしてゐる事が出來たが、自分は、世帶持になつてからはじめて、お正月と經濟難とはいつも一緒にやつて來るものだと言ふ事を、しみじみと心の底から知つたのだつた。お正月の間際、即ち暮れには、この暮れを如何に乘り切るべきかについて、大方ならぬ努力を費し、一夜明けていざお正月となれば、年賀だ何だと雜費がかかる上に徒らに人の出入りが頻繁になり、雜用が殖える。それに私共のやうな夫婦かけ對ひの家では、お正月には、必ず一日か二日、或は三日四日位かかる事もあるが、一方が年詞廻りに出掛けてしまふし、それがすんでからでも、お友達が誘ひに來たり、こちらから出かけて行つたり、とにかくお正月だと言ふで、男は何と言つても今のところ部がいいから、何かにかこづけては外へと出掛けて行つてしまふ。それでこちらはお正月と言へば、毎年きまつたやうに、一人ぼつんと留守番ばかりさせられてゐる。

自分のところではお正月の虚儀虚禮なんかは、人生にとつて何うでもいい事として、お餅なんかでも、搗くだけの餘裕のある時は搗かうし、經濟上それだけの餘裕のない時は無しですませる。何うかすると松かざり（それもごく小さなのだけれど）でさへ今年は立てるのを止さうかなどと思つたりする位だから、その方は、自分達の氣の持ち樣で何うにでもなる事として、人並に出來なくとも一向苦にならないが、何と

言つても暮れには、一年間の諸拂ひのけじめだけはきちんとつけておかなければ第一他人が迷惑をする。日頃日用品は全部現金買ひと言ふ事に決めてゐるので、暮れへ來てその方の拂ひにまごつくやうな事は殆んどめつたにないが、材料屋の方は、いくらかまとまつたものが殘つてゐるので、それを片づけるのに毎年おしつまつてから一苦勞するのが例である。

勤人でもあれば賞與とか、手當とか年によつて幾分餘計な收入の當てもある譯だが、私共のやうにどんな小さな商賣でも自分で商賣をしてゐる者にはそれがない。精々景氣のいい年で仕事が少し忙しくなる位が關の山であるのに、やはり暮れたと思へばおとくゐや、ふだん世話になつたところへ位はお歳暮にも行かなければならない。といふやうなわけで、何處も同じ事とは思ふが、お正月を迎へる迄には經濟上なかなか並大抵の事ではないとつくづく腹の底からこぼしたくなる。

現在のそれにくらべると、まだ何と言つても親がかりのうちはそれが直かに身に應へないだけ氣樂でもあれば呑氣でゐる事が出來た。殊に幼い頃千葉の田舍の家で過ごしたお正月には忘れられない思ひ出のかずがある。

暮れの二十七日か八日頃になると、祖父はきまつたやうに後山から大きなお松と竹とを切つて來た。夕方さわさわといふ竹の葉ずれの音——さみしいやうななつかしいやうな——をさせながら祖父が門邊へそれを立ててゐる。そのまわりをとり卷きながら、近所の子供達と一つしよに、もう幾つ寢るとお正月が來るなどと言ひながら、うれしくはね廻つてゐた當時の氣持だけは、二十年後の今日でもなほはつきりと思ひ出す事が出來る。

土地の習慣で、お正月三ケ日うちは、おひるに炊き立ての御飯と大根なますとを桝に入れて、それを一々ていねいにお箸ではさんでお松へあげて歩く。それが大底毎年私の役であつた。先づ本屋から門、庭前、庫の前、厩の前、納屋の前、薪小屋の前、後山の稲荷の前、とぐるぐるとお松の立つてゐる所を廻つてあげて歩くのだが、子供心にも何となく浮々して、それをする事は一つの樂しみでさへあつた。晝間お友達と羽子をいたり、夜家族のみんなと双六をしたりする事は東

京とちつとも變りはないが、しかし何と言つてもあの頃は樂しかつた。母もまだ若かつたし、家の暮しも今のやうに、こんなにぎりぎり一つぱいに切りつまつたものではなかつた。すくなくも幼心にはさう思へた。

私が幼い折祖母から受けた感じは比較的冷たいものであつたが、反對に祖父は私にとつて、いつも眞綿のやうに暖い感じのするやさしい人であつた。なつかしい祖父、幼い頃から現在に至る迄私はほんたうに祖父が好きであつた。父よりも誰よりも私には祖父がなつかしい。しかし震災の前年その祖父もとうとう亡くなつてしまつてからは、田舍へ歸るにも張り合ひがなくなつてしまつた。

幼い頃の私に、多少でも樂しいお正月の思ひ出があると言ふのは、結局私にこのやさしい祖父があつたからである。

蛸の足

林芙美子

明日が正月と云ふ日、四國から母が私をたよつて來た。

父はその頃北海道へ行商に行つてゐて、四ケ月あまりも音信不通であつた。

母は心細くなつて、東京の私へたよつて來たのである。泣いても笑つても明日は元日、私は日給七拾錢也の、セルロイドの色塗り女工であつた。いくら働いてもどうにもならないと思ふと、なまける事半月、ガツガツ食つて通つてゐる私を見て、母は呆然と切ながつた。フク〳〵とした手織の母の綿入れと、私の疲れた羽織を私は師走の夜、質屋へ持つて行つて參圓五拾錢借りて來た。母が持つてゐた貳圓ばかの金は間代に入れてしまふと、私達は、しみじみ旅の三圓五十錢での正月を淋しく思つた。

六日の朝

正月の思出

英美子

一つ二錢ののし餅の幾切れかを買つて來てさゝやかなぞうに、母の好きな蛸の足、新聞紙の上の食卓には、蛸の足だけが、赤くて、うれしかつた。

カツン、カツン追羽根の音を聞いてゐると、遠い北海道の雪に埋れてゐる、みじめな父の姿を思ひ出して、二人共泣いてしまつた。

でもその正月は、炭を買つた事と、二日の夜明風呂へはいれたのが一番うれしかつた。

今年も街の魚屋には蛸の足がブラさがつてゐる。丁度七年前の正月です。

小學時代から高女卒業迄、一緒だつた竹馬の友、永井ヤス子さん（奈良女高師の教授となられて、姓も變られた筈）と、列んで年の始めの歌を唄つて、紙袋に這入つたお正月のお菓子を貰つて、講堂を出て來た。

「紋が、落ちさうになつてゝよ。」

ヤス子さんが指先で、私の背中の紋を抑へて呉れた。私は生涯その紋付を忘れ得ないであらう。それは、母の心盡くしの切付紋であつた。私の母は後妻で、私の義兄を極端に大切にしなければならなかつた。九十余になる大祖母と八十に近い舊姑と、それらの間に挾つて、私の紋付を作るのを遠慮しなければならなかつた母よ。手製の切付紋よ。

年始廻り――義兄は、父や祖父の名代で知己の名刺受けに、名刺を放り込む役目を仰せつかる。――私は、先生方のところへ年賀に廻らされる。

――學校で御年始は濟んで來たんですもの。――不可ません。羽子は後で幾らでもつけます。

小都市のこと、二度も三度も義兄さんに道で行き逢ふ。――君、あれ、君の妹さんだろ？

富士が倒しまにお堀の水に映つてゐる邊り。――これから、僕達が向ふから來たらば、君、ずん／＼引歸へして呉れ給へね。道で逢はないようにして呉れ給へ。

中學時代の義兄と、高女の妹。義兄は朋友達から問はれるのが極りが惡いのだ。妹は、罪なくして或正月、散々に兄から叱られた。南無三寶、久留米絣の一團が行手から現れたらば、三十六計逃ぐるに不如。

餅搗きて年祝ふ國、高しまだ
結ひておみなの、嫁ぎゆく國。

根岸、御行の松のほとり。宵の内から油染みた座布團に根を生やしてゐて、徐夜の鐘を冷めたく聽いて終ひ、頭に大きなものをのつけて歸る頃は、睡眠不足の正月の曉が來てゐる。御ぐし上げ處は、結ふ方も結はれる方も、どうせ今夜は徹夜の覺悟。

東海に名だゝる寺の徐夜のかね
百八つ鳴りて、春明けにけり。

興津、清見寺の中腹。百八つ煩悩の鐘の響きを枕の上にきいてゐると、何處からともなく水仙の香りがして來る。――金は、亭主が渡して呉れるもの。着物は里から送つて呉れるもの。――と思つてゐた時分の白痴の正月。

一人の兒を脊に、一人の子をだましながら餅を燒いて、迎へた貧しかつた／＼時代の、懷かしい／＼正月。

始めての下宿生活に、昨日に變らぬ剝げた膳の上に、歪んだアルミ鍋と、乾からびた燒鯛のつけられた前に座つて、嫁ひな餅の大きなかたまりを見詰めながら、一人、ほろ／＼と涙を落とした、數年前の正月。

須磨、明石の勝景が車窓にほの／＼と明けてゆく時。

――おぞうにのお支度が調ひました――

新調の上衣をつけた列車ボーイが、膝の上にひらりと載せてゆく活字。さすがにいぎたなく寢てゐる者もなく、皆の瞳に小兒のやうな新鮮な無言の挨拶がたゞよつてゐる。素的に民衆的氣分の旺溢した嬉しい／＼汽車の正月だつた。

右傾的なシッポ

―ある男性達について―

女はごみつぽいと云はれる。

女は小ブルジョア的で仕様がないと云はれる。

勿論さう云ふのは男性達である。

よくもこんなノホホンな事が云はれる物だと私は時時思ふ。

私は新らしさうな顔をしてゐる男性達がそのおそろしく右傾的な封建的なシッポを出す場合をまざ〳〵見て來た。

それが最も露骨にあらはれるのは戀愛における彼等の態度である。

常には知識とか思想とか云ふものでかくしてきたこのシッポを彼等はこのもつとも主觀的な戀愛と云ふ行爲においてはイカンなくバクロして失ふ。

山田順子に對する勝本清一郎をみるがいゝ。

山本和子に對する大宅壯一をみるがいゝ。

彼等は等しく最も女性の存在を重要視するマルキシズムを奉じてゐる。しかしながら結極彼等がその戀愛の對象としてもとめる女性は夫の意志に盲目的に服從して猫のやうに甘える人形に他ならない。

全くお話しにもならない次第である。

女は順應性がありすぎて、カブレやすくていかんと云はれる。

しかしながら私はこの順應性からも一つの長所を見出したい。

即ち女性が古いからをやぶつて新らしい世界にスタートした場合には在來のあらゆる缺點をすみやかに精算して、男性以上の飛躍をし得ると云ふ事を申したい。

十一月の本郷座で築地の殘留組のやつたロマショオフの『建設の都市へ』をみた人は、革命後のロシヤにおける男性的が未だ精算し得ぬ前の生活のカスのために、新らしい意志と思想をもつてどん〳〵計畫を實行して行く女性的にいかにケイベツされヤユされたかを見るであらう。

この場合における女性の飛躍は實にその順應性の効果に外ならない。

私達女性は余りに過去において受動的で消極的であつた。男性が缺點として指摘したるに對して餘りに寛大であつた。

私は明日の光命を得るために、積極的に男性の一言一行を吟味して、この右傾的なシッポを矯正しなければならない。

十二、十七

―川瀬美子―



春に書く

奥むめお

今年は、十幾年振りでお正月に故郷へ歸りませうと思ひ〳〵してゐたのでしたが――。子供たちと、私も子供時代の心に返つて田舍のお雜煮を祝ひませう、と、あんなに心にかけて樂しんでゐたのに。

さう思ひつゝ、又、旅のあわたゞしさに搔き亂されず、自分の生活について、仕事について、家族のこと友だちのことらについてゆつくりと考へてみるのもいゝことだと、思ひ直してみるのでした。

考へてみるとこの頃久しく、私は忙しい仕事におひたてられてばかりゐて、ゆつくりした氣持で友だちと話し合ふまもなかつたし、子供たちのために心靜かな愛撫をくれてやる余裕もたずに來ました。(澤山の手紙が、ゾンザイに封を切られたまんま束ねられてあつて、私の心の重荷になつてゐます。ゆつくりと讀み返したいと希ひづゝ)

道など歩いてゐてふいと、爽かな風で頰をなでられたことを感ずるやうな時がゐるものです。そんな時しみ〴〵と、私は、あゝ、風が吹いてゐたことさへ知らずにゐた、ほんとに何といふガサツなことだらうと自分で自分に考へさせるのでありました。

◆

然し、忙しいのは私ばかりでせうか。

さき頃も神奈川縣の女子青年會の集りに行きましたとき、あとの茶話會の席上で、農村の忙しい最中にかういふ催しをしたことについて大分各郡から抗議が出ました。では何月が一番、忙しくなくてよいのか、といふ事になつた時、結局、農村で忙しくない時はないといふことになつてみんなで笑つ

てしまひました。これが笑ひ事でせうか。

十一月は收穫で忙しかろう、と云へば十二月も、屑繭ひきで忙しいし、さうでない者も正月まではどちらかへ臨時雇ひとして手傳ひにゆく話がきまつてしまつてゐるから、大多數の者は會合に出かける余裕なんか持合せてゐぬ、といふのであります。春も、夏も、秋も、冬も、余りに忙しすぎる農村の生活。

たとへば農村の副業として鷄を飼ふことはこの頃の流行のやうですが、一羽あたり一錢の飼料が要るといふのに、それの生む卵は一羽あたり平均年々一〇〇個とみて一個につき金三錢也。結局三圓六十五錢の元をかけて三圓の收入にしかならぬ忙しさぢやありませんか、と云へば卵一つが三錢にも賣れるでせうか、二錢三厘です。二錢五厘です、と云ふのであります。米にしても、青物にしても、繭にしても、日當みずの何といふ貧しい取引でせう。

この貧しさから農村を救ふために、生産物をその勞働價値に相應しいだけに評價せしめ消費物資を正しい價格で取入れる工夫、生活全體をもつと能率的に、合理化して快適ならしめるための協同精神。無論その協同精神を社會機構の根底まで押進めて行かなければなりませんが。私はいつも思ふのですが、農村の人たちは、何故あの貧しさ、あの死物狂ひの忙しさ、あの非文化さに腹も立てずに默々と打耐へてゐるのであろうと。腹を立てることをすら、いつのまにか、どこかへ取り落して來てしまつたらしい呆けた生活！

怒りを怒りとして組織あらしめて立ちたいと思ひます。希望を相互の希望の上に重ねて積んでその實現のために協同したいと思ひます。一つの大きな組織の前に個人の涙も、愛も、怒りも。願望も、一切を熔かしこんでその上に私たちの生活をたてなければならぬと思ひます。

◆

ロンドン發聯合通信は、英國の下院で一九〇九年の養老年金法及び一九二五年寡婦年金法が、大體次のやうに有利に改正されることに協定がなつたと傳へてゐます。

一、七十歳以上の寡婦には貧富の別をおかず一率に一週一志の金を支給すること、(これまでは生計に困難なものに限ると、資格を限定してゐたのでした。)

一、三十五歳以下の寡婦に關しては、末子が十六歳に達するまで、扶助年金を支給すること、(從來は十四年七ヶ月

に還すればその資格を喪失することになつてゐました）

この改正の結果英國は八千萬圓の豫算の增額をみると傳へられるのでありますが、この案が上程せられるや、討議は午後四時より夜を徹して翌朝の八時二十分まで果てしなくつゞき、つひに政府側の妥協申込みに依つてやつとこれだけの所に歩みよつて協定が成つたと云ふのであります。婦人や子供に關する議案といへば、いつも政界のどさくさ紛れに握りつぶされてしまふ運命しか持たないわが日本の現狀と、これは何と著しい相違でありませう。

すでに大正十三四年頃よりわが國にも、母性保護、母子扶助法制定を必要なりとする輿論が大分高まつて來ました。その後そのため法律案制定の機運も稍熟したか、に見えたのですが、前議會で、僅かに四百萬圓を計上した救護法といふのが出來て、母性の保護も兒童保護も、一切合切その四百萬圓の內でといふことになつたのでしたがそれすら金子がないといふ理由から實施期が延期又延期の浮目にあつてをります。

一片の法律に依つて私たちの母性がどれだけの保護をうけられるものでもない、ことは余りに解り切つた事實ですが、法の手前ほんのちよつぴり救濟しておけといふ風な誠意なき現在の取計ひ方に私たちの母性は火のやうな憤りを感じないではゐられません。

婦人として私たちは、母性のもつべき當然の權利として母子扶助法なり寡婦年金なりを要求するのです與へらるべき恩惠ではない、當然の權利として母性は尊重されるべきであります。私たちはさういふ社會を私たちのもつ母性の名に於いて協力して、もち來さなければならないのだ、といふ覺悟を一層固く強くするばかりであります。

◆

婦人雜誌のあれかれが競つて美人投票をしました。選ばれて誌上に揭げられてゐるのを見ながら、私たちは口を揃へて云つたことでした。

こんな、型に嵌つた美人！

み樣考へやうに依つて美人にも幾通りかありませうけれど、いはゆる美人とみられてゐる人の中に、生きて動いた美をもたない、デス・マスクの樣に硬化した女の顔が尠くないのです。

道を歩いてゐて、電車にのつてゐて、會社や銀行の窓口で私たちは澤山の若い美人を見るのですが、あの潑溂さはどう

職業婦人社の創立當初

職業婦人社は大正十一年秋、創立準備に入りました。丁度八年前に屬します。「職業婦人社だつて！　女を家庭の外につれ出す様な仕事は日本の國には合はない。家族制度を破くわいしやうとする危険思想だ。もつての外だ」と、云つた様な苦言忠言を、私は至る處で、世に識者といはれてゐる人や新進思想家を以て任じてゐるやうな人達からさへ随分聞かされたものでした。



當時は、若い婦人の間でも未だ、結婚か？職業か？　といつた風な考へ方をしてゐた頃で職業につかなければ結婚へ、結婚生活に入ればむろん職業なんてもう關はりがない、とみるのが普通だつたのでありました。春秋二回宛してゐた職業婦人社講演會にもしきりに結婚か？　職業か？　の問題をくり返してゐました。

これから、女はどん／＼職業生活に進出する。これは良い悪いを超越した時代的な大勢だ。この大勢を前にして今から、私たち婦人が職業生活を少しでもよいものであらしめるために準備するところがなかつたら、結果は憂ふべきものがあろう、大いに輿論を高めなければならぬ、といふのであちこちの會社の事務員、タイピスト、女教師、外交員等雜多の職業婦人を糾合して職業婦人社を創立したのでした。

職業婦人のためにクラブを建てたい、といふ創立當時から私の念願も去年から具體化の一歩を進めて目下募金中でありますし、團體（職業婦人協會）も内部組織を固めて、すでに會報を持ちました。なほ、一方、消費組合運動への轉向は、職業婦人社の内部から婦人消費組合協會を派生するに至りました。（昭和二年）（寫眞は奥）

（前頁より續く）

です？　と、隣りの人に話しかけたい程のことが屢々あるのです。人に雇はれて働いてゐる内に、多くの職業男子はその生彩を奪はれました。うなだれて、あの困憊し切つたやうな男の姿を御らんなさいとでも云ひたいほど。

然し、この頃漸く街頭に進出したばかりの職業婦人たちには、これまでの長い鎖から解き放たれた小鳥の自由さと、明日に繋ぐ希望があるばかり、たしかに、女性進出の力強さを思はせずにはをかぬ新時代相がそこにあります。たゞ、彼女らの漲るやうな若さ元氣さの上に、常にしつかりした未來への見通しを結びつけて組織あらしめたいと思ふのであります。

知らねばならぬこと——

豫防醫學

醫者排除！
商人の不當利得を知つた
われ〳〵が最も惡ラツな
商人醫者の暴利にいつ
まで踏みつけられてゐ
やう！ 醫者にかゝ
らぬ工夫！
健康增進への平生
の注意書
養將率——
生命愛護！

星野鐵男

一

奥さんから、何か豫防醫學に關することを、七八枚も書くやうにと、いふことであつたので、私は色々考へて見た。豫防醫學とは何であるかを、知らぬものはないかもしれないが、しかも今日の豫防醫學の全體に亘つて、書いて見ることは、極めて有益でもあり、面白くもあるに違ひないであらうし、或は豫防醫學がどんな徑路を辿つて、今日の狀態にまで達して來たかを、歷史的にたづねて見るのも、趣味深いことであらうし、或はまた、豫防醫學の立場から、今日の醫術といふもの衛生行政といふものを、批判して見ることも必要で爲めになるに相違ないとも思はれるけれども、私は今それ等のこと、どつちかといへば、學問的に興味のあることを、こゝに書いて見やうとは思つてゐない。

現在の社會に於いて、呑氣な顏をしてはゐられない、日々の仕事に全身全魂を打込んで、職業に從事してゐる婦人と、家庭にはゐても、その責任と義務とを果してゐる婦人とを、眼の前にしてゐる今私は呑氣にも見えるやうな問題は後廻しにして、何よりも先に、知つて貰はねばならぬことを、出來る丈要領よく、書いて見たいと思つてゐるのである。

二

豫防醫學の立場から、何よりも先に知つて頂きたいといふのは、我が國に於いては、婦人方の健康が、男子のそれよりも著しく劣つてゐるといふことである。殊に青年婦人の死亡は、青年男子のそれよりも、遙かに多いといふことである。

昭和二年には、拾五歲以上三拾九歲未

滿の婦人が、

　　拾萬七千九百八拾壹人

死亡してゐるのであつて、同年齢の男子

　　九萬五千六百貳拾人

の死亡に對して、實に

　　壹萬貳千三百六拾壹人

丈、多く死んでゐるのである。

かくも多く青年女子の殆亡を見るのであるが、その中未婚の女子死亡は、五二、七五三名であつて、拾萬餘の死亡の中半數以上を占めてゐる譯である。而かも、未婚者の大多數は、二十五歳未滿で、四二、四〇八名を數へるのである。

既婚婦人に於いては、同じ年齢階級にて、四九、三七〇の死亡を見、二十五歳以上三十九歳以下の者が、三八、三八三名となつてゐるのである。

それ故四十歳未滿の婦人達に就いていへば、未婚の者では、二十五歳以下の若い人々が多く死亡し、既に結婚生活にはいつてゐる者では、二十五歳以上の人々が多く死ぬといふことになるのである。

三

高等小學校を卒業して、社會人となる大多數の婦人の健康狀態が、思はしくないといふ事が、以上の數字から、推定することが出來るのであるが、然らば、この十萬餘の死亡者は如何なる病氣のために、その大切なるかけがへのない生命を捲き去られるのであらうか。

先にあげた、十五歳以上四〇歳未滿の婦人死亡、一〇七、九八一名の中、肺結核のために斃れたものが、二九、九一五であり、腸及腹膜の結核のために、生命を失つたものが、九五七六名あつて、兩方を合せると、

　　三萬九千四百九十一人

が、結核の襲擊によつて、倒されたのである。

私達はこのことを、はつきりと知らねばならない。數多い病氣の中、最も大なる强敵は結核であるといふことを。

豫防醫學といふ時には、主として傳染病の豫防、その中でも、急性傳染病の豫防を狙つてゐるのではあるが、わが國の狀態からしては、學者も行政官も、商工業者も勞働從事者も、皆結核の豫防程、重且大なるものはないといふことを、明かに知らねばならないのである。

四

職業に從事してゐる婦人達、家庭の仕事に朝から晩まで暇もなく立働いてゐる婦人達。あなた方の周圍に冷靜な觀察眼を向けて御覽なさい。顏色蒼ざめて、何となく力のない、生の倦怠を感じたやうな人々が、數人また十數人、必ず居るに違ひない。眼を閉ぢて、あなたの知れる限りの人々を、頭に浮べて御覽なさい。それらの人々の中には、必ず、既に病床に横はつて、希望も歡喜もなく、慰めもうすく、淋しい日々を暮してゐる人が、數人また十數人も居るのを見出すであらう。

わが國には結核のために、惱まされてゐるものが、百萬人もゐるであらうといふのである。

かくも多い結核性の疾患が、今は周圍の人々の間に見出されるのではあるが、やがては、わが家、わが身にも襲つて來るのであるから、私達はうつかりしてはゐられないのである。それ故まづ第一には、かゝる病氣にとりつかれぬやうに、丈夫な時から、ちやんと、分別して置かねばならぬし、第二には、もしか、不幸にして、病魔の手に落ちるとしても、早くその束縛から脱する工夫をして置かねばならぬのである。

私はほんの一二言を短かく書いて見たいのである。

五

一體人は何故に病氣するのであるか。自然界に於ける、動物は、私達のやうには、病氣をするといふことがないではないか。

人々はこの問題に就いて、餘り考へてゐないやうであるが、實は、豫防にも、治療にも、先づこの問題を答へてからでなくては、深入りしてはならぬのである。

私はいはねばならぬ。

『人間が病氣することの多いのは、自然から離れたからである』

と。この考を深く深く頭にいれ、考へに考へて見るならば、私のいふ意味が明瞭となるであらう。

「自然から離れる」とはどういふ意見か。人間は社會――而かも複雜極まる此會――をつくつて、そこに、不自然な生活――動物以下の生活をしてゐるのであつて、自然の命令を無視して、淺薄極まる人知を最高の手引として、盲者の案内

を受ける盲者の旅行見物のやうな、生き方をするのであるから病氣にかゝるのである。

病氣にかゝりたくないなら、今の社會に於いても、出來る丈、自然に則した生活をせねばならぬ。人工を出來る丈少なくした生活をせねばならぬ。そして、私達の中から湧いて來る、自然的要求の聲に從つた生活法を確立するやうに力めねばならぬ。

六

結核豫防に最も必要なものは、新鮮なる空氣、そのうちにも輝く日光、出來る丈人工の加はらない食物、疲勞の強くない勞働である。

都市生活に於いて、新鮮なる空氣が、充分に勞働してゐる室に、通つてゐるであらうか。事務室、商店、百貨店賣場、工場、等等に、新鮮な空氣が充分に通つてゐるか。私は極めてあやしいといひたい。然らばどうするか。一寸休憩時間でも利用して、新鮮な空氣を吸ふやうに力めねばならぬ。一日の勞働が終へて、家に歸へつても、その室の中に、いつも新鮮な空氣が通つてゐるやうにせねばならぬ。睡眠中も、絶えず、新鮮な空氣が供給されねばならぬ。魚も獸も、新鮮な空氣のないところにはゐないのに注意し給へ、空の魚に學び、野の獸に學べ。

次には、心地よく輝やく日光を浴びることが大切である。都市の勞働するところに、出光がさしてゐるか。決してと返事が聞へるやうに思ふ。日中でも、電燈で事務をとらねばならぬところで、働いてゐる婦人達は少なくあるまい。その室が如何に藝術的に美はしく建てられてあつても、日光の光線がさし込まぬところは、惡魔の住むところと心得てよい位である。どうするか。ひまある毎に、日光を仰ぎ浴び、胸一ぱい光と空氣を吸ひ込むやうにすべきである。家へ歸へつてからも同樣である。光を嫌ふ人は、必ず結核病魔に手ごめにされるに違ひない。

第三には、出來る丈人工の加はらない食物をとれと私はいつた。私達の食物で、人手の加つてゐないものはない。果物だとて人手は加つてゐる。然し私がいふのは、材料が食膳にのぼるまでに於いて、出來る丈人工を加へぬやうにすることをいふのである。

精白米は目にきれいであつて、日本人の榮養を惡化した、

最大不良食である。ブルジョアにはいゝかも知れない。然し米を主食物唯一食物とせねばならぬ階級には、精白することは、大禁物である。結核になりたい人は、白米をとれ。その白い如く、あなたの顔も時と共に、蒼白となるであらう。白米食では脂肪分が足りない。ヴイタミンが足りない。蛋白質が足りない。無機分が足りない。かくして、病氣になるのは當然すぎる。私達は白米食を全廢せねばならぬ。

魚肉獸肉を採らねば、榮養にならぬといふ考へ方は、日本に醫學を輸入した人々のなした大なる誤りである。牛馬羊山羊鹿象等等を見たまへ、少しも肉食せず、健康を享樂してゐるではないか。それは草食動物だからであるといふか。西洋人を肉食動物とすれば、私達東洋人、日本人は草食動物になるのである。心配することはない、穀菜食で完全に生きられることを試驗したまへ。

私は與へられた紙數をもう越して仕舞つた。尙ほ一言いふ丈でやめねばならぬ。私は、「疲勞の強くない勞働」といつた朝から晩まで、働かされて、疲勞のないといふことはない。必ず、疲勞は來るであらうが、夜の安眠でその疲勞をすつかり醫することが出來るのである。それが醫しきれぬやうに程度の強い勞働、疲勞が續けば、必ず健康を損ずる日本の母達の多くは、慢性疲勞の狀態にある。母達の休養法に就いて私は考へてゐるが、今は書けぬ。

七

私達は知らねばならぬ。健康狀態がよくないことを、多くの未完成の婦人達が病魔のために捲き去られることを。然し、病氣は確かに豫防出來るものであるといふことを知らねばならぬ。そして豫防に必要なことは、

新鮮な空氣を絕えず呼吸すること
天地創造の朝の輝くが如き日光を浴びること
出來る丈人工を加へぬ食物をとること
疲勞の強くならぬ勞働に從事すること

等であることを知らねばならぬ。

× × × × × ×

× × × × ×

雨の場末

傘のしづくをしぼつて裏口から歸つた私の耳に勝手元で合羽を脱いでゐる間、表の店先の押問答がきこえてきた。

　米屋の二階に一年近くも間借りしてゐる私は、何時の間にか、仕事にあぶれては店へ嘆願に來る人たちと、米屋との押問答にも平氣になれてゐたが、まはらないたど〳〵しい言葉つきに、――朝鮮の勞働者だなと思つた瞬間、ふと、今歩いてきた横手の露路口に、おおかた夫の交渉を待つてゐたらしい朝鮮の女の、子を負ふた姿が浮んだ。

　――とにかく天氣さへ直れは仕事はあるのだから――といふ意味を覺束なく述べて、今夜の米を、頼んでゐる聲に、おつかぶせるように「貸だほればかりで、店もやりきれない、金を持つて來なきや駄目だよ」と米屋のやけに煙管を火鉢の角に、はたく音がつゞいた。

　暗い梯段を登つて部屋の電燈を捻ると、私はそのまま暫らく、狹い往來を見下ろす窓ガラスに、疲れた體をもたせてい氣持が重くなるこの時刻を、喧噪な外の光景にまぎらそうとした。

　八百屋、魚屋、漬物屋、支那料理、乾物屋、それらの目白押しに、灯をともした軒並みの下で賑々しく客を呼び初める聲に狩り立てられるように、右へ、左へ、傘の群が、ごつた返へす其の間を縫ふて、づぶ濡れの勞働者が、泥濘を、びしや〳〵ふんで通る。

　毎日聞き馴された支那料理屋の、はやり小唄。それを破つてふいにすぐ横丁をこちらへ大鼓を鳴して、歌聲が近づいてきた。

　――ああ、今日は日曜だつたな――と、いつも思ひ起させる其の歌聲と太鼓は、近所のホーリネス敎會の傳道である。やはり鮮人である。その若い宣敎師の家の前を、通り過ぎる度に、四五人の髪を分けた青年以外に私は殆んど、集つて來る信者らしい姿を見かけたことが無かつた。

　小降りの中に立つてその一團が熱心な傳道を初めた、四ツ角を、彼等の同志は・――國を追はれ、激烈な生活の苦闘に、打ちひしがれてゐる彼等の同志は、すた〳〵と無關心にすぎて行つた。立ち止まりも振りかへらうともしない、彼等は、盲ひた人の子は天國を今望んでゐるだらうか、それとも、××で戰ひとる、奪取する××を手取り早く望んでゐるだらうか……。

　靜止したうす暗い部屋中に私の錯覺はふと、そんな疑問を雨の中に投げた。

婦選運動ニュース

賣つて儲けて買つてトクする店

本所にある江東消費組合のショウウインドウにこの頃書いてある文字。

はゞかり乍らこの店は、そこいらの店とは大違ひ、賣つて儲けて買つて得する。

成程、巧みに云ひ明かした言葉ではある。商人との取引では賣つて儲けて買つて損するのが常道。（買者と賣者の利害は常に相反してゐます）消費組合では、賣つて儲けるとしてもその儲けは組合の儲けであり、組合員がそれだけ得をするのでありますから、まことに買つてトクをするのであります。

買物は組合から、組合を儲けさせて、組合を強めよ。消費組合の確立は結局われ〳〵消費者トクであります。

社民黨も分裂

右翼無産政黨の堅壘を誇つて來た社會民衆黨は、去る黨大會の席上で大阪側の全國同盟（六千）が脱退して新黨組織に入つたので、全國的に動搖を來たしてゐます。この結果大阪市會議員として社民黨を代表してゐたもの七名を失ふことになつた上に、來るべき總選擧で當選確實の中に數へられてゐた鈴木文治、西尾末廣兩氏の地盤がくづれましたつゞいて全國的な動搖の兆しがあります。

無產政黨廿分卅裂

これで無産政黨は大山氏一派の勞農黨、水谷氏の勞農大衆黨、麻生氏らの日本大衆黨堺氏らの舊無産大衆黨、安部氏らの社民黨、淺原氏の民憲黨を初めとして地方無産黨まで數へて來たらキリがない程です。それに議會解散をあてこんで地方の野心家どもがドン〳〵と群小エセ無産政黨を簇立してゐますから、無産者の政治戰線は今や完全にその共同戰線を紛碎し終つてゐると云はねばなりません。

婦選同盟五週年總會

婦選獲得同盟で第五回總會を十二月十四日に行ひました地方支部の金澤長野ナゴヤから、七人の地方代表者も參加して總勢一〇〇人、中々盛大でありました。



◇

五十八議會は開會へきとう解散しさう。

政治的野心家、もうろう共は今や選擧準備で多忙だ。無産黨も既成政黨もあるものか。當選第一主義の政權餓鬼の泥靴で、又われらの生活がじうりんされる時だ。

民衆よ・踏みにじられるな、と叫びたい。

民衆がはつきりと自分たちの日常利害の上に生活を確立しやうとして起つ時・初めて彼らの泥靴から救はれる。

◇

のし餅を饒つて爭議あり。

さき頃の東京市電のストライキのとき無條件で調停を一任された丸山警視總監が從業員側に有利に當局の面目を潰した條件でまとめたといふので、筧局長

女事務員はストライキ破りせぬこと



十二月六日、東京市の電車及び乗合自動車が一さいに留まりました。市民は足を取れて蒼くなりました。東京市の財政行詰りのためと稱して賞與二割減昇給停止を申渡したのに反對して市電從業員組合の一大ストライキであります。

其の頃の話。同じく市電關係の女事務員諸氏がより〳〵話し合つては憤激の様子、何ごとかと聞けば、

市電側では、車掌も運轉手も一人も出て來ぬものだから補充兵をかり出してゐるのです。第一には曾つて車掌運轉手をしてゐた有經驗者、女車掌も必要たといふので、事務服のまゝでいゝから出ろ〳〵と云ふのです。

然し、進んで積極的にストライキを助けるわけにも今のところゆかないとしても動かない電車を動かしに出てストライキ破りをしたりすることは絶對にいたしますまい。と今申合せてゐるところですとのこと。その意氣〳〵。

國際婦人問題調査會

ロンドンの國際婦人參政權及び平等市民權協會から、一九三一年度大會の準備として次の各部門にわたる婦人問題の一大調査委員會を設置するやうに、わが日本の婦人參政團體に申込んで來ました。

一、男女平等道德の標準。二、結婚婦人の國籍問題。三、男女勞働の機會均等。四、私生兒及び母の問題。五、平和と國際聯盟問題。六、婦人警察官問題。七、法律上の婦人の地位の平等。八、婦人參政權問題。

これらを機緣として、日本の婦人團體がその運動に必要な調査研究の道に入ることは力強いことです。

なほ、國際的なこの團體にわが日本から同じ趣意の參政權團體が三つ別個に加盟してゐることについていつも問題になるのですが、何れ聯合の機關でも作るべきでせう。

は納まらぬ胸を撫でゝ齒をくひしばつてゐた。

ところが、年末に際し、罷業に參加しなかつた六千五百名に對して慰勞の意味でのし餅を三枚宛與へるといふのだ。從業員組合ではこの分裂と懐柔政策に反對して

一、のし餅券は遠慮なく貰ふこと。

二、貰つて全部支部に預けること。

三、支部はこれを現金に換へて爭議資金にすること。

といふ緊急指令を發した。どう落付くか問題であるがストライキに參加しなかつたものも全部組合員であり、爭議の結果ボーナスの減額を一割に喰ひ止め昇給、馘首について共通に利益をえたのであるから、當局の支給するのし餅を組合資金にあてるのは當然だといふのである。

◇

地方の婦人會の中には會員たる婦人の席順がちやんと定つてゐてその階級別が中々大變だといふ。それも、旦那樣の地位が

◇家賃を下げさせませう！

——家賃値下げの運動が全國的に起る——

十一月二十四日、東京市會議員有志が發企して家賃地代値下げ全同同盟を組織しました。集るもの百五十名。次のやうな決議をしました。

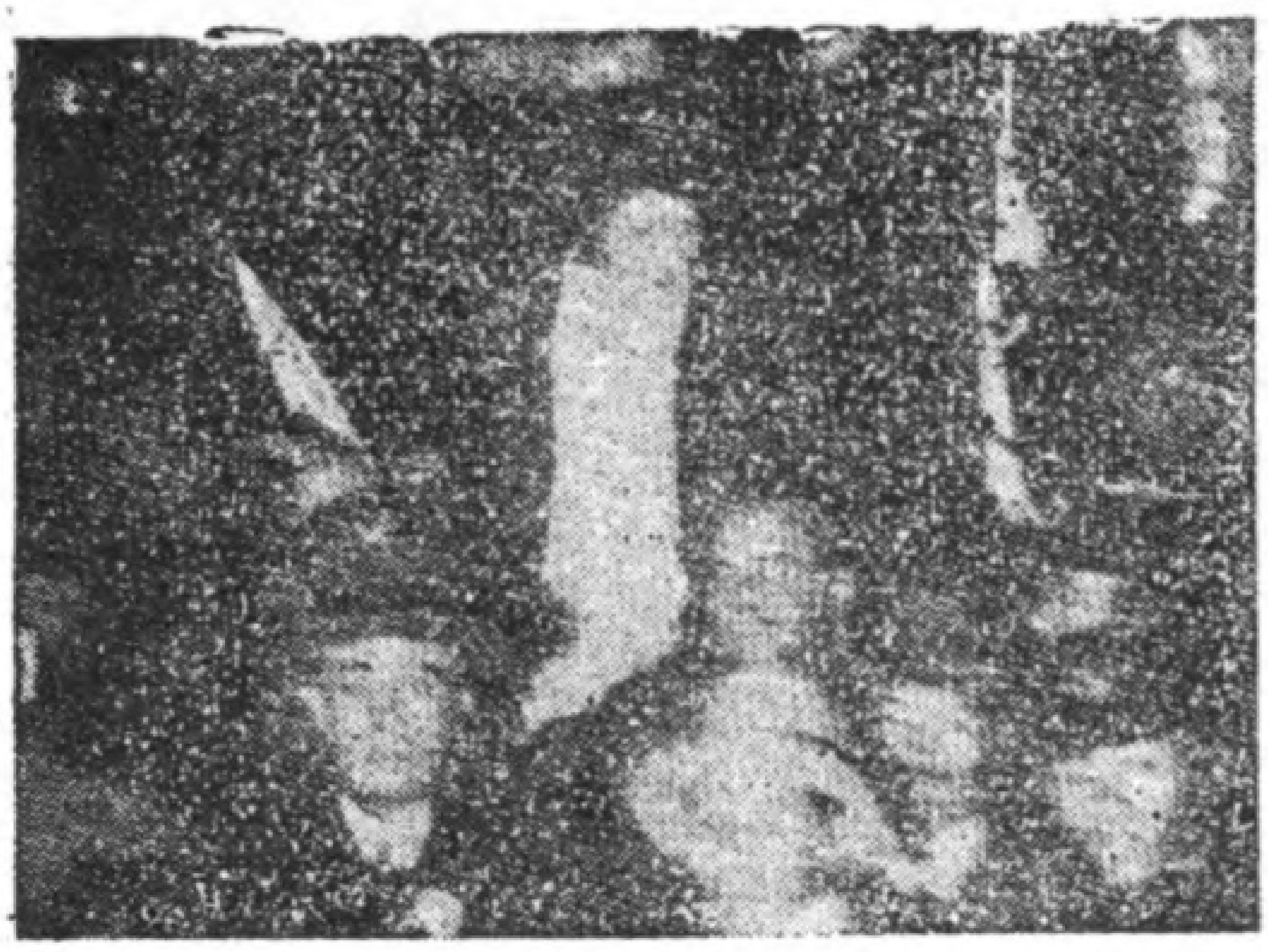
一、家賃の三割値下げ、ゆくく五割減まで漕ぎつけること。

一、敷金全廢、或ひは家主をしてこれに利息をつけさせること。

一、地代値下げ。

めいくの住宅の三割値下げ交渉を即時實行しませう。拔かりのない家主は機先を制して、五分、一割程度の値下げを申込んで來てゐる樣ですが、あくまで三割減！ それ以下は絶對反對だ！ 交渉成らずば、妥協なるまで不拂斷行。

映畫俳優ダグラス夫妻の渡日



寫眞は、ファンの熱狂的な歡迎に、メリーが歩くことも出來ず肩車に乘つたところ、

女給同盟成る

カフエー・バーの女給がお出錢をやめてもらつたと思つてホツとしたのも束の間、丸山總監は女給稅をかける、と出て來たのでびつくりして起ち上つた。結局力弱い女給の頭にかゝつて來るそんな稅金が實現されては耐らぬといふので、演說會を開いたり陳情に行つたり最近女給同盟といふ力強い團體も出來たのである

勞働總同盟大會で婦人代表員が奮闘した諸議案

一、婦人參政權要求

一、婦人及び幼年工の坑内作業即時中止

一、修養團及び宗教婦人會の排擊

一、寄宿舍の改善

一、幼年工及び婦人勞働者の特別保護法の制定要求

ものを云ふ階級だといふからあきれてものが云へぬ。困るのは政治家、新聞記者、中ぐらゐどこの金持の妻君連をどこにわりこませるかにあり、いゝ加減頭をなやますといふ。

◇

大工、土工、鳶職なんどの自由勞働者三十數名が内務省に押しかけて扶助法を制定せよと迫つた。これは、自由勞働者の病氣や公傷害のときの保護法が來議會に提出される筈であるが、どうも解散があるらしいので、そのためにこの大事な福利問題がフイになつてはたまらぬといふので、この案の上程實施を急いでほしいといふ陳情であつた。

職業婦人も、自らの生活を守るために、何とかしないか。

◇

駐支日本公使佐分利氏の自害後、後任に選定せられた小幡氏は、國民政府より「ペルソナ・ノン・グラタ」即ち不適任者だといふ折紙つけて拒否して來たと。

◇

小川前鐵道大臣がせしめた收

寡婦年金

英國下院を通過した改正案

——八十萬圓增額案可決せん——

英國では寡婦及季兒の四金增額案が議せられてゐます。二十餘年前から養老年金法があつて、七十歳以上男女で生計に困る者には一週十シルリング(約五圓)を終身給付してゐます「寡婦、孤兒及養老強制保險法」は四年前から實施せられてゐるものでありますが、これは僅少ながらも強制保險金をかけてゐる者だけしか救濟しない保險法です。これを改正して貧富をはず一率に、七十歳以上の寡婦に年金を與へること、及び、子供の扶助年金給與期間を長くする、といふ骨子であります。

この改正の結果豫算は八百萬ポンド(我が八千萬圓)の增加となる見込みであるといひます。

高尙な性慾と產兒制限

——われらの母性は泣かむ——

山田わか女史は、產兒制限問題とアメリカ式の試驗結婚問題を結びつけて、「性慾といふものはだん〳〵高尙にして行はなければならないもの・であり、高尙にして行くといふことは自制を伴ひます。けれども產兒制限といふことは、その反對に自制といふこと無し・もので、從つて性慾を低下を意味します。」云々、(婦女新聞より)と云つて、產兒制限反對を三たび主張してゐられます。

この調子で行くと實際問題としては幾らでも子供の出來ることを恐れない性慾が高尙な性慾で、今、子供か出來ない方が子供の爲にも親達の爲めにもいゝと希ふ親達はみんな低下した生慾の持主たといふ變なロジックになりはしないでせうか。

日本人は高尙な性慾の持主だ。だから子供が矢鱈に出來る。出來た子供がどん〳〵死んでゐる。——幼乳兒死亡率が、日本は世界で一等國であります。お母さんも、生みすぎて結果から來る衰弱で澤山死んで重大な幼乳兒問題母性問題を起してゐるのです。

山田さんを若返らせて、子供の十人も產ませてみたいぢやありませんか。

軍縮と平和會議へ

婦人矯風會の林歌子、ガントレット恒子氏は、ロンドンに開かれる軍縮會議と、ワシントンに開かれる婦人平和會議に出席のため出發。戰爭防止と婦人の責任につき協議の筈。

賄金凡そ五百萬圓といはれてゐる。お次の大物山梨大將は、朝鮮を足場にして幾つもの疑獄に關係して醜財を積んでゐる證據が歷然たるにも拘らず、陸相其他の忠言も入れず現職を退かうとしない。

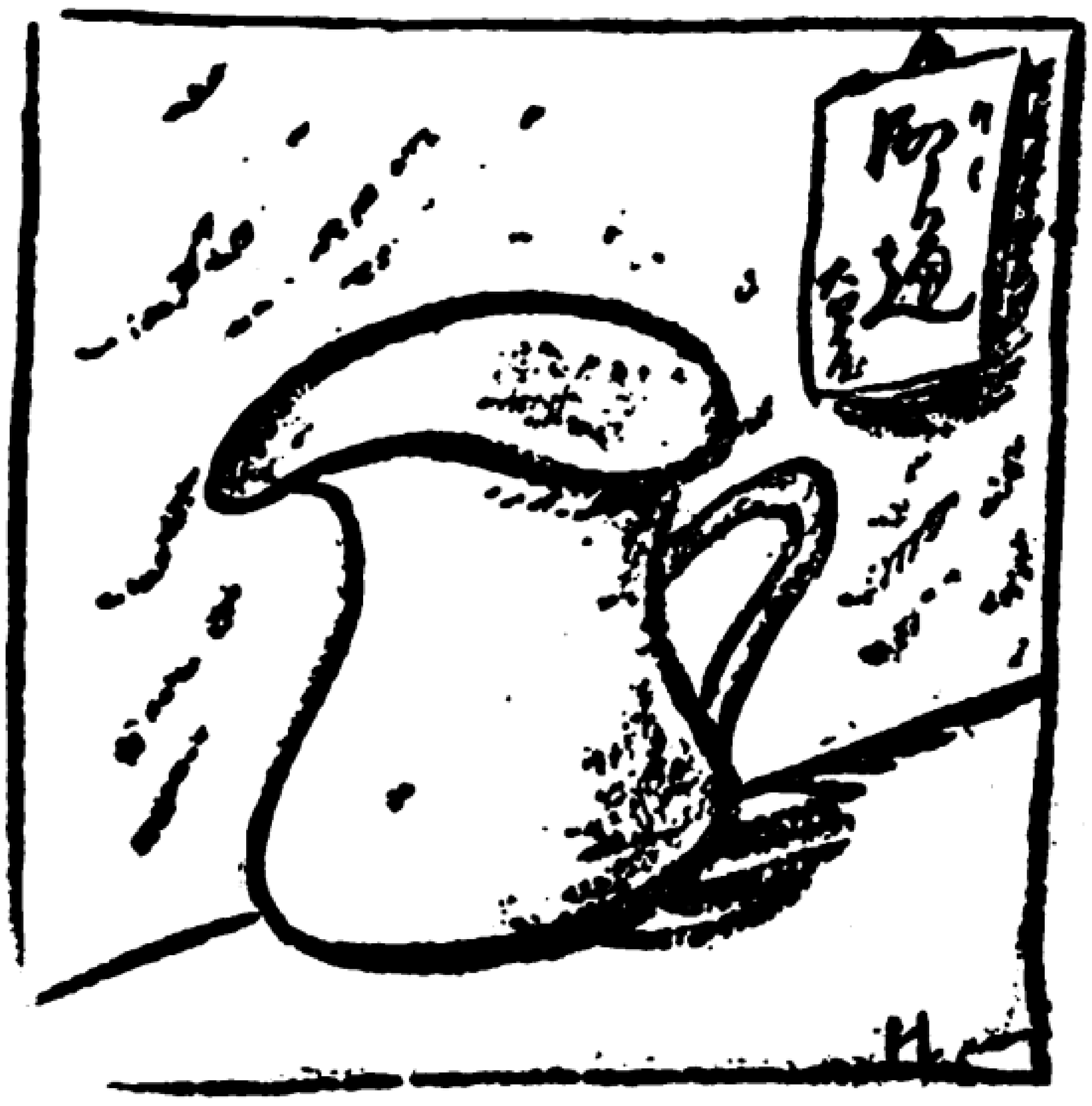
これ位のことで法に觸れたら今の政治家は大臣だつて何だつて、みんな刑務所ゆきさと、うそぶいでゐるといふから豪氣なもの。

◇

思想善導、思想善導と御題目をならべてゐる中に肝心の御本尊の文相が疑獄事件に引つかゝりが出來て止めた。日本男子の見本と云ふべき現役陸軍大將が瀆職で引つぱられた。これでは御祖師樣を雪隱へ祭つて日本國民におがめと云ふやうなものだ。

日記の拔書

富本一枝



——日夜

今夜、道に迷つたゝめに、私は日暮里の場末を見てしまつた。見やうとして見たのではなかつた。偶然であつただけ心にこたへたことは非常であつた。

町に灯がはいつてからも幾度か來たことのある處であつたから、今夜も勝手のわかつた日暮里の町を訪ねてゆく家を目指して道を急いだ。

歩き馴れてゐる道筋の中程までやつてきてから、心急いてゐたまゝに近道をしやうとして或る酒場の角をまがつた。見覺へのある煎餅屋の前も通つた。セルロイド工場の裏門もボール箱製造業の門先きも通り過ぎた。暮近い町の夜天にぶつきら棒に突きあがつてゐる、目あてにして歩いてきた湯屋の灰色の煙突を臭い泥溝の板を踏みながら見上げたまではなんでもなかつたが——それからなんゝ間違つたのか曲り角にあるべき筈の生綿工場の半分破損してゐる表門が見あたらない。はて、道を迷つたな——そう思つた時はすでに——これは後になつて解つたことだが——私は日暮里の場末の最も複雑な地帯 泥溝鼠 やうに馳せ廻つてゐるのであつた。だがこの邊はまだまだ上等の部であることも解つてきた。軒の低いがたがたの平家建の長屋ばかりではあつたが、土間があり茶の間と臺所が手狹ではあるが、外から一目に見通せはしたが、とにかくそれだけのものがあつた。けれど、糸くづのや

うにこんがらかつてゐる細民窟に踏み込んでしまつた時、私は恥じながらも肩布で口を深く被ふて通らねば呼吸一つも出來ない程一切のもののすべてが不潔であつた。人間が、はきだめのなかに生活してゐる有樣は何處から考へて見ても、そんな考へるなどといふ余裕さへなく不合理そのものであつた。何故或る人間だけは三疊一間に親子七八人もが犬猫のやうに手足を縮こめてくつつきあつてうごめいてゐなければならないのか。紙屑、ぼろ屑、空瓶がうづ高く、といふより小さい場所すつかりをそれらのもので占めて、その屑のあつちこつちに生きた人間の顏や動く手が見へる——これが家庭である——と誰が決めたのであらう。

古綿が戸口まではみ出してゐた三疊そこそこの家——これでも一家族の家庭である——に乳呑兒を背負つたお内儀さんが兩側に二人づゝ四人の兒を古綿のなかに埋めて、天井から光りの微な五燭光の電燈がぶらさがつた下で、貧しい晩飯をとつてゐるのを見た。箸と茶碗と鍋と、それだけが脚の歪んだ茶卓。それでも膳らしいものの上にあるだけであつた。彼等の家具は古綿だけである。骨だけの障子と一つの押入れに詰められてゐる破れ方題の襖、眼についたものはそれだけであつた。古綿、古綿、

人間の女と人間の子供等、茶碗と箸と鍋と脚の歪んだ茶卓と——これでも人間は生きて居れると簡單に言ひ得られるものであらうか。

私は重たい風呂敷包をもつて歩いてゐる。この包のなかに、一つ二十錢の美しい、美味な富有柿が十個と、中村屋の胡桃入の黒光餅が五本と、智識を漁る新刊の書物が二冊と手提が這入つてゐる。私は大恩のある身内の老婆の病氣見舞に行く途中である。

富有柿も黒光餅も新刊書も、夫の働きによつて得た金で買つたものではあるが、この古綿に埋まつて一つの鍋から晩飯を啜りあつてゐる家族の夫婦も稼ぎ拔いて、恐らくこの晩飯は富有柿一つにも相當してゐない。こんな幼稚な感慨は識者の冷笑を買ふ程度ではあるがその氣毒な家族を見た刹那、私はなんとしても自分のもつ風呂敷包の重たさに壓迫を感じた

合理、不合理、私が一歩一歩足を踏むたびにその言葉が偶數奇數の配列のやうに、1と書けば2と現はれ、3がそれに續き4といふ偶數が次に列ぶ——合理、不合理、合理、不合理、そのやうに次もその次も、その次の家も私といふ一人の

人間を狹んで古綿、空瓶、紙屑、古新聞、犬猫のやうに身體をくつつけ合つた、よごれた人間の塊。右を見ても左を見ても燭光の微かな夜道にもつれ合つて群れ列ぶ細民窟の光景であつた。不圖、日次緋紗子氏の死が頭をかすめた。私は瞬間たちどまつて心から目禮した。なげきは人世の敗亡である――と言つた氏の一行の句が一滴の泪と共にがたぴしやな不潔な泥濘板に霰となつてころがつた。私一人が苦しむわけはない。だが、私は苦しくてたまらなくなつた。慘酷にやつつけられて罪深い者のやうに汗を流して私はあへいだ。見るにはあまりにも激しいむごさばかりである。博愛も慈悲もこゝにはその淺深さへないではないか。生きることはかくまで苦しく極上の寥寂をもつものであらうか。路上に行き過ぎる人々は悉く疲勞し、穢物のために――ただ枯れはてた細々とした肉體をやつと支へてゆくといふことだけに――落窪んだ眼をひきつらせて歩んでゆくではないか。私は意久地なくも面を伏せた。觀念したもののやうに――。

　私は全く道を見失つてしまつた。性質の異つた困惑がゆきづまつた泥濘の路上に暫く私をたたづませた。私は道を誰かに聞かねばならない。そこには質屋ののれんが十二月のつめたい風にはためいてゐた。私は店先きをのぞきこもうとした突端、年寄つた女の顔が私をうかがつてゐるのに氣がついた。

「日暮里谷中本一〇一八番地は何處らでせうか……」

「谷中本？　さあそれは解りませんが、この邊は三河島よりですが……」

「三河島？！」私は途方もなく遠方まできてゐたことがわかつて俄かに心細くなつた。やむを得ないことだ。仕方がないから日暮里の驛まで戻つてゆかう。停車場ならばきつと知つてゐやう――そう思つたからあらためて驛に行く道を聞いた。質屋のお內儀さんはわざわざ門口まで出てきて、目標になる荒物屋だとか、八百屋だとか、燒鳥の屋臺の有り場所を附け加へて細々と敎へてくれた。どうしたのか私はすつかり弱氣になつてゐたと見へ、その人の親切にも泪が滲み、眼先さがあつく曇つてしまつた。死んだ母のことまで思ひ出されて來た。

　日暮里の驛に出るまで、可成りの道であつた。女工、勤人、土方、人足、行きあふ人々のすべては勞働者ばかりであつた。燒鳥屋の小さな屋臺では、たつた今、こんろの熱があが

り火加減が頂上といふところらしく、木炭の焰に生醬油のかゝつた豚の肝がたらす脂肪がこの界隈には不調和な威勢のいゝ音をたてゝゐた。

屋臺に頭をかくした男が――股引の男の脚が六本――大聲でわめいてゐた。

「おい、とつつあん、緊縮、緊縮で俺等は二つの穴に見離され……つてわけよ、なあ勝公……」

「全くよ、穴つて奴は苦勞さすよ、喰はねば呼吸が止まるし、××××出來ねえとこいつが――いやにいきりたつしね……」

「そうよ、ちげへねえ。上の穴より下の穴さ。穴には全く苦勞しますね、だ。所謂、穴から生れて穴で苦勞し、穴に這入る――といふからね……」

「わはゝ……、」六本の股引ががたがた笑つた――。

その通りだ。この人達の言ふことには僞もていさいもない。すべて正味である。幾度か頭のなかでいま聞いたばかりの男の言葉を繰返へしながら私は默々と喑い、歪みだらけの道を急いだ。

人間、生、死、

どんな思想が地球上を風靡しやうと
そこに殘されるものは
眞實に生きやうとする人間の
終日終夜あへぎ廻つてゐる姿ばかり、

これは目次氏の詩の一節である。



博物館の憂欝

——母と子の記録より——

伊福部敬子

一日、私は博物館の床をふんで立つてゐた。外に、金色(こんじき)の風の吹く日であつた。低くよどんだ空に、裸(はだか)の木がつきさゝり、その粗(あら)い一本の枝に、青いランプのやうな西日(にしび)が引つかゝつてゐた。

それは、まことに、冬の近いことを約束する風景であつた。そして十分に私の心をわびしくさせる風景であつた。

秋から初冬にかけて、私は毎年この淋しさを味はされる。このやうな資本主義的都市文明の中に、近代的な生活様式に於て生活しつゝある私に、たぶん、幾千萬年の昔に私共の祖父が長い冬期を前にした時に感じた黄昏(たそがれ)の感情が生きて甦(よみがへ)つて來るのであらう。秋は、私共のする營みのすべてを地に落してしまふやうな氣がされる。どんな積み重ねも皆無駄であるやうな絶望感をおこさせる。

ところで、私は、博物館の床に立つてゐた。私はそこに、私共の祖先が私共へまで、だん／＼にのぼり、だん／＼に近づきつゝのこしてくれたものがあると信じたから。

けれども、私はこれが間違(まちが)ひであつたことを知らなければならなかつた。私は博物館の門を出る時、もう一つ分の憂欝(いううつ)をその背(せ)に負(お)つてゐた。

高い硝子窓からさし入る光線は、そこにさま〲の品の存在するのを見せてくれた。人形や、鋤や鍬の農耕具や、壺や杯や盤のやうな食器具や、衣服の代や、澤山の武具や、樂器や、繪や木彫や、もつと〲澤山のものを。

しかし、それらは皆死んでゐた。生命を失つてしまつてゐた。これらの死物の上に、殘酷な光線は明るすぎる！

それらの一つ〲は、かつて私共の祖先の生活の中に、その文化の中に、その時々の生活樣式の中に、生きて使はれてゐた筈である。だのに、各時代の生活の、指端でしかない形骸をのこして、「文化」の光は消えて失はれてしまつてゐる。

一つのものと一つのものとの間にあつた有機的なつながり、それも私共はこゝでは見ることは出來ない。たゞ順序もなく、秩序もなく、丁度今日の藝術家といはれる職業人が製作したものを並べるのと同じやうに、並べられてゐる。

あの許久和（小鍬）がどんな生活樣式の中に於てつかはれたか、それが唐鋤を使ふことによつてどんな風に農耕の樣式がかはつて來たか、私共は、環のやうになつて文化をつなぐものを、見失つてしまつた。

そして、何といふ武器の多いことだらう！　私共はこれを見ると、私共の祖先が、戰爭と攻略ばかりを生活して來たかのやうな錯覺を强ゐられる。

何といふ不幸であらう。もつと平和と協力生活の表象をより强く示すことの出來ないといふのは。私はこの武器で、代表される過去を信じない、いや、これもあつたにはちがひない。けれども、私共の先祖の大部分の生活は、もつと別のところにあつた、そしてその中から今日の文化はつくり上げられて來たものであつたのだ。私は、それを强く信じてゐる。

それにしても、何といふ憂鬱を、私共はこの灰日の博物館の中に感ずるのだらう！

原始女性は太陽であつた、といふ言葉は、かつて平塚明子氏によつて唱へられた言葉だときいてゐる。私も亦、まことにそのことを思ふのである。

或人類學者の説によると、「文化」といふ言語は、もと、「耕す」といふのと同義語であつたといふことである。

人間が、土地に土着して、處女地を耕し、そこに種子をおろす。それは即ち生活の種子をおろすことなのである。半年の後にゆたかな實りを豫想して、その間を待つ。實のりを得た時、人々は更によりよい收穫を希望するであらう。そし

て、その上に、更に努力をつみ重ねるであらう。こゝに「文化」の萌芽をもつことが出來るのであると。

　そして、耕すことをしなかつた民族は、文化をもつことが出來なかつた。無際限の曠野に、草から草を追うて、土着することなく、生活の根をおろすことなく、遊牧して歩いた民族は文化をもたなかつた、少くとも遊牧してゐた間は文化をもつことが出來なかつたと。

　原始――嚴密にいへば原始ではない、ずつと下つて新石器時代のことらしいが――女性が太陽であつたのは、女性が耕作に主としてあづかつてゐたからである。農耕時代、農耕民族に於ては、農耕に從ふものが權力があり、文化の中心をなしてゐた。そしてそれは女性であつた。彼女らは太陽であり、文化の中心であり、文化の火をとつてゐたのである。私はこのことを考へると、女性の上にかゝつてゐる榮光とその使命　大きいことを感ずるのである。

　支那の「家」といふ言葉は「火を守つてゐる一團」といふ意味ださうである。これは、垣内松三先生に敎へられたことである。

　火をとりまいてこれを守りつゞける一團、人間が偶然に火食することを知つてから、火はどのやうに神聖なものに考へられたであらうか。この火を守つたものは、誰でもない、女性であつた。彼女は、祖先からもしつゞけた火を絶やすことなく燃しつゞけることによつて、生命の火を、そして文化の火をもちつゞけて、今日の文化を招來した、或は今日に及ばしめた。次の時代のために火をもち歩くものは、當然女性でなくてはならない、私はかたく信じてゐる。

　冬の一日、私は未知の人からたのまれた短册に書いた。

「人類の火を守りつゞけたものは女性であつた」と。

　大勢の女たちが集つてゐた時である。

一人の中年の婦人が、もつと働きたいといふことを話し、そしてそのためには、もつと設備のとゝのつた托兒所がほしいといつた。

「今日の托兒所は、勞働者のやうな人ばかりが、ほんの邪魔ものをあづける位の意味で預けてゐますでせう。あんなのでなく、私共も安心してあづけられるやうな、教育も設備もゆきとゞいたものをほしいと思ひますわ」

　設備のよい教育のゆきとゞいた托兒所が必要なのは、私共

だけだらうか。今日の設備の悪い托兒所に子供をあづけてゐる人々には、あの悪い托兒所が相當するといふのであらうか。

（私は、もつと立派な托兒所や、保育園や、學校やを、皆のために、本當にほしいと思ふ、けれどもそれは私共が男性と同じ仕事をするためにではない、もつと母の役目を完全に果すためであり、從つてそれらはそれ自身を目的としてゐる）

それから又若い婦人が言つた。

「私共は、家を借りると、ずいぶん不自由と不便を經驗してゐます。それだのに、その不便からのがれるためには、一人一人が貯金をして、自分だけが都合のよい家を建てるといふことで、借家の困難からのがれてゐる。それだからいつまでたつても借家はよく改良されない。もし、お互に協同して、貸家人をうごかすやうにすれば、私共はもつと早く快い借家に住めるやうになり、後から來る若い人々も同じ困り方をしなくなるでせう」

（これは當然のことだ。私共は、私共の經驗の累積を、タテに、次の時代の子供にそのまゝつたへると共に、ヨコにも窓を開きあひ、垣根をのぞきあうて、經驗を協同のものにしなくてはならない。ヨコに手をひろげることによつて、同時にタテにも、より早く進むことが出來る、と私は信ずる）

それにしても、私はこの二婦人の間に時代の相違を明かに見る。そして「社會」への距離の遠さと、近さとを。

これは或婦人雜誌の座談會の序であつた。

時評

疑獄で共同戰線

勳章疑獄、鐵道疑獄、取引所疑獄と芋づるのやうに洗ひ立てゝると前大臣、前次官、前賞勳局總裁、前朝鮮總督、某富豪、某大會社長といつた風な高位高官がずる／＼と珠子つなぎになつて驚くべき犯罪事實が留めどもなく出て來る。

初めは、解散をひかへての選擧對策として輕い心で行はれたらしいのに洗ひ立てゝみると、與黨（現政府側のこと）の大臣や僚友の足もとまでが危うくなつたので政府はあわてゝ揉み消し運動を初めたり、檢擧を打きる樣にといふ命令を出して反つてやぶへびにしたりのへまをやつてゐるが、かういふ事實を通して政友會も民政黨もその他の群小政黨も既成政黨といふもの全てがいかに不淨な金子の上に建てられてゐるものかといふことをわれ／＼の前に雄辯に暴露してくれた。

さうした意味で、いかに選擧の革正が唱へられ、綱紀粛正がとなへられやうが、一人あたり尠くとも五萬圓、多いのになると切りがないと云はれる黨員の選擧費を黨から提出する必要がある以上は何かの形で莫大な利權を掴まねばならぬ。かういふ建て前の上に立つ現在の既成政黨から本質的には國民が何を期待することが出來やう。

かうなると政治といふものはどうせそんなものと誰しもいはゆるアナーキスト流に簡單に片づけてしまひたがるものであるがさて現實の問題は、四分五裂まるで蜂の巢をつゝいた樣に現在は啀みあつてゐる階級的立場に依る無產政黨の合同と强化をわれ／＼の努力で進めて行くより外ない。そして强力な無產政黨に依つて今日われ／＼の生活を直接に支配してゐる泥沼のやうな利權政黨に向つて敢然鬪爭を開始しなければならぬ。

女學教育の建て直し

文部省では中學校師範學校の教育改善についで女學校の教育の改善にも手をつけ初めた。在來のやうな劃一主義を排して、卒業したらすぐ實際に役立つ婦人を作るやうに、といふのがその眼目であるらしい。

日本の女子教育といへば百年一日の如く賢母良妻主義で學校を卒業すればすぐにも嫁として姑につかへたり、妻として夫にかしづいたりすることだけを押しこんでゐたものであるが、人としての教育とか實際に役立つ教育とかいふことを非常に遲まき乍ら考ろ云ふやうになつて來たのだ。尠くとも時代の中心本流をなしてゐる生活難の脈うつ今の世の中で女がいつまでも人形のや

うな良妻賢母一點ばりではもう立つてゆかれぬことはあまりに分りすぎたことであつた。

たゞ、私たちは學校の教育だけにわれ〴〵の教養の一切を托しておいてはいけないといふことを常に知らなければならない。澤山の金子と長い時間をかけて——而も多くは都會中心に、都會文明を中心にして授けられてゐる今の教育のためと、われ〴〵のもつ本來のものを伸ばされる代りに歪められ押しつぶされ、正しく世の中をみる眼をぶちこわされてしまふ危險さへ決してないとはいはれないのだ。然し教育のほんとうの改造は、上に立つ文部省の役人の頭によるより、教育をうくべき者自身の自發的自治的な要求より、自らの力でやつてゆくべきである。すでに農村の自由大學とか、或種の婦人講座とかいふ催しが、續々行はれてゐることは力强い。

ダグラスの足下で躍る日本

映畫俳優ダグラス夫妻の、高速度日本觀光旅行に對して、映畫ファンの示した白熱的歡迎ぶりは近頃人の目を見張せた出來事である。

バクダツトの盜賊をして「脅迫的歡迎」と叫ばしめ、ヤンキー女のメリーに、悲鳴を擧げさせる程の恐しい人氣は必ずしもジヤナリズムの宣傳だけではなかりさうだつた。緊縮、失業、俸給何割減、家賃値下げ夜逃げ、追剝ぎ、首縊り等々、世を擧げて不景氣風に吹き晒されてゐる最中にこれは亦何んとした事であらう。

が事實原則はちつとも不思議ではない。警視總監がいくら目玉を光らしても、カツフエーと宵やみの女が增える世の中だ。ダンスホール、トーキー、レビュー、キネマそれは例のハンドアツプ(泥棒)と一緒にアメリカが持つて來る現代日本の最も大衆的な風潮である。然も映畫は、この流行の先頭を切る前衞だ。ダグラスがキリスト以上にもてたつてちつとも不思議はないと云ふ論理になる。

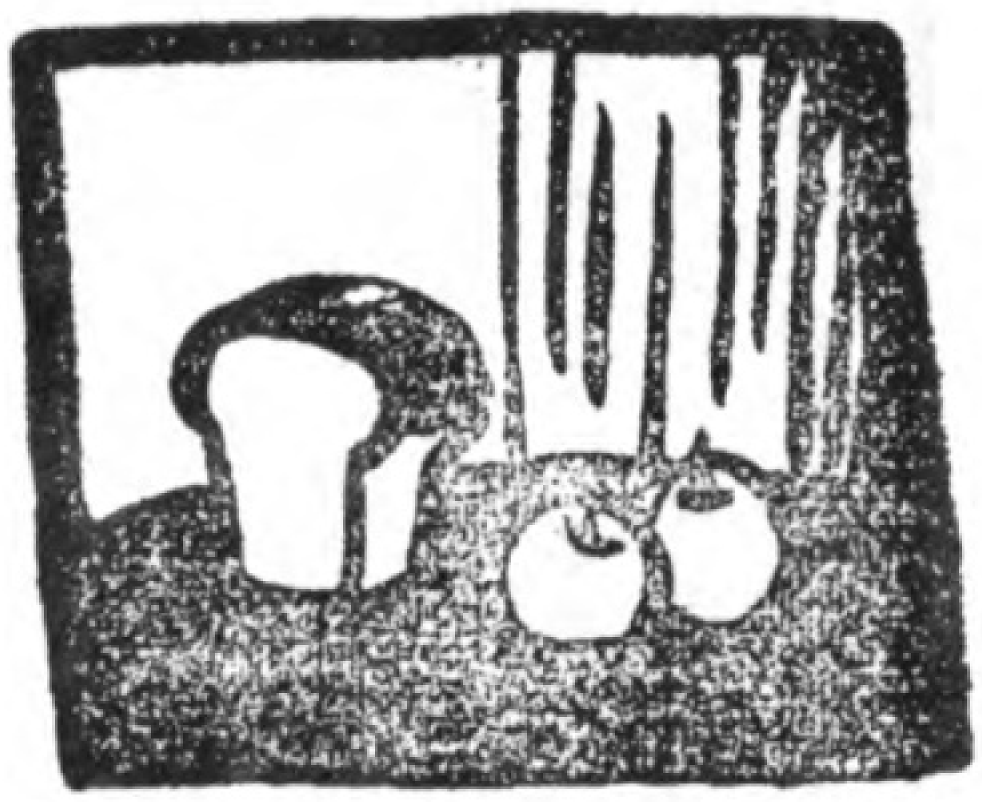
繁榮第一主義の大キャピタリズムの紐上に咲き亂れたジャズ、そのジャズは百パーセントに日本の大衆をジャヅナイズした。がアメリカから我國を訪れて來た名士が、我ダグラス君一人でないやうに、アメリカが我々に與へたものも唯にジャズだけでない。

近世の怪物金融資本の侵入これである。今やアメリカはその大資本のはけ口をたゞに日本といはず全世界に求めてアメリカニズムで世界をおはうとしてゐるのである。

我々この怪物に對して何を考へ何を用意しなければならないか。

ダグラスの足下で躍る日本よ、御前は何處へ行くか?。

◇　◇　◇　◇



女流文壇の展望

生田花世

一

昭和四年度の『中央公論』『改造』『新潮』『文藝春秋』『文學時代』『近代生活』これだけに第一の文藝視野を限定して去年を語り、以つて本年の女流文壇展望の参考としたいと思ふ。

『中央公論』――『稲妻』(宇野千代氏)

『改造』――『失樂の歌』(宇野千代氏)『燃ゆる薔薇』『冷たい露』『旦那様子供犬』(野上彌生子氏)『敷設列車』(平林たい子氏)

『新潮』――『お浪と母親』(宇野千代氏)『森の中』(平林たい子氏)

『文藝春秋』――『月夜の便り』(宇野千代氏)『胎盤』(中本たか子氏)『レストラン洛陽』(窪川いね子氏)『誕生日』(三宅やす子氏)

『文學時代』――『白痴の唄』(宇野千代氏)『舞れない日』(財部茂子)『朝鮮人』(平林たい子氏)『モスクワのミイラ取り』(中本たか子氏)

『近代生活』――『朝の無禮』(中本たか子氏)ささきふさ氏の小説二つほどのりたりとおもふもその號の『近代生活』手許になし。其他なほあるだらうとおもふ。

以上かゝげたのは小説であるが、劇は『改造』岡田禎子氏の『夢魔』がのり『文藝春秋』には上田文子氏の『母』宇野千代氏の『廻り燈籠』がのり、『新潮』には『三角謎』といふ喜劇が上田文子氏によつて執筆されてゐる。

一覧すれば分るとほり昨年一番執筆回數の多いのは宇野千代氏、次が平林たい子氏、新進作家として登壇してゐるのが中本たか子氏窪川いね子氏財部茂子氏の三人、劇の方では上田文子氏岡田禎子氏の二人が注目された譯なのである。

『中央公論』『改造』『新潮』『文藝春秋』これらの大雑誌にのることをもつてその作品の絶對的の價値理由とすることは事大

主義であつて、文藝を階級的に見る不快感を催しはするがつまり、同人雑誌、『火の鳥』『窓』等にのるものと、『中央公論』『改造』などにのるものとの間に明らかなる價値差別を附するといふことはまことにいはれのないいとはしいこととしなければならないのであるが、悲しいかな、こゝにかうしてジヤアナリストの爲すのにならつてかういふ風に並べて見なくてはならない理由もある。といふのは、大雑誌の讀者は何萬とかぞへ、小雑誌の讀者は一千にも足りないかもしれぬ。『火の鳥』に書いた山川朱實氏の小説が一千の讀者しかもたない時、『改造』にのる宇野千代氏の讀者は何萬といへるかもしれないのである。從つて女流文壇の展望は讀者の多い人についてより多く語るべきであらう。

十何年も前になるがアメリカへゆく前の田村俊子女史は、新年號に、いかなる作家（勿論男性の）よりもより多く書いてその精力をおどろかしたことがある。宇野千代氏の本年の活動はほゞそれに似てゐる。劇を書き小説を書き、隨筆を書き、なほ年末には報知紙上長篇小説にまでその才能をこゝろみようとされてゐる。かくも旺なる文藝上の發展は、そのよつて來るところを考へればまた私逹を刺戟するものがある。宇野千代氏はその家庭を本年は完全にもたない、そして良人尾崎士郎氏と別れ切つた女史は、その文藝上の仕事をなすべく完全に自由である。書けばその作をのせる舞臺に事かかず書かうとする題材は何であらうともはや、遠慮すべき何人もないのである（萬一、以前尾崎氏との同棲で夫婦としての束縛を多少とも感じあつてゐたとするなら）まさに宇野千代氏は滿開の花であつた。かうした女性文藝の滿開のかういふ道程は意味深く考へしめられる事ではないか。女史は『尖業の歌』其他、忌憚なくいろんなものを書かれてゐて、その生活の自由奔放とともに作品の發展性もみとめられるのであるがこゝに批評家の見ようとするものは、その量ではなくて質である。批評家はその作品なり、藝術家的人格の暗示する明日を問題にしなくてはならない。

宇野千代氏に對して的確にいはば、この人はより多く昨日の作家である。その老練と、その情痴の魅力以外、この人によつてわき出すべき新しい潮がまだ見出されてゐない。そこにこの人の多作の理由もあり、いろんなこゝろみもされてゐる原因がある昭和五年度に於いて、なほ昨日の名聲と、昨日の創作力とを持續し明日の作家たり得るには、なみ大抵のこ

とではないとその昨今の苦勞のほどがおもはれるのである。

平林たい子氏は、明らかに今日の作家である。その出世作『施療室にて』第一出版について、本年第二出版たる『毆る』を出されたが、これには本年發表の作品の大部分がのせられてゐる。『毆る』『嘲る』この二篇の力作以外、『森の中』にしても『敷設列車』にしても、氏の作品は、その技巧の點に於いて、平面的であるとか、殼が小さいとか、その構成に於いて習作的であるとかの批評もあるが、マルキスト唯一の女流作家として、その人氣は隨分上つてゐるとおもふ。マルキストが現代風潮を招致したといふよりも經濟界の不況が人の心を刺戟すること多く、マルクスズムに合流していつた觀があるため、女史の人氣もこの時代心理に十分合致した點から起つたとおもふ。女史はたしかに時代の寵兒といへよう。私は平林女史の作品が昭和五年度に於いて、或は固定的になることの危險、單調になりやすい杞憂をのべたいとおもふが、聰明なる女史は既にこのことを豫知して、その執筆の方向を論文の方に轉換させつつあり、濫作を自ら戒めつゝもあるやうだ。女子の家庭生活は極めて自由で、夫君小堀甚二氏とは夫婦といふべく、より多く同志としてのいい關係に於いて結ばれてゐて、女史の執筆を障害する何ものもなく、却つて小堀氏によつて激勵されつゝあるらしいことは何といふ多幸であらうと羨ましいものだ。

野上彌生子氏の『燃ゆる薔薇』『冷たい霧』は『眞知子』なる長篇のその一部々々の題である。女史はこの頃その理智冷靜の方向轉換を左傾に取りはじめて來た。もう少しこの人に情熱があらばとは皆人のおもふところであるが、そこがこの人の持味、いかんともしがたいであらう。どういつて見たところでこの人は理智考量で作をしてゐる人で、どんな飛躍でもその情熱ではしないであらう。

新進作家中本たか子氏はどういふ婦人であるか。『朝の無禮』其他、本年前半朝の作はエロテイシズムでもつて、注目をよんだ。彼女は男性への辛辣なる批評客觀を何の遠慮もなく書いてのける。女性側からも男性側からもかうした思ひ切つた動向は面白いとおもへたとおもふ。なほ後半期には左傾隨分その方面へ飛躍し得た、なか／＼の勉强家である、決して他人への追隨をこゝろよしとしないところのあるこの人にはいい將來は約束されてあらうともおもへる。窪川いね子氏はアナアキストである。『レストラン洛陽』は力作であった

が、この人の個性は十分あらはれてなかつた。なほ第二第三の作品が待たれるわけである。財部茂子氏については格別いふこともない、ひよつかりといい舞臺に發表し得てすぐ忘れられゆくのは何として見ても寂しいわけではなからうか。

劇に於いての上田文子氏は、十分に左傾してゐる婦人だ。あの若さで、あの環境でと一應はいぶかしがられるが、この人の敏感なる批評心はほんとに時代を見てゐるのだ。ねがふところは、この人のためにより多くの苦勞あらんことを文藝の士のためには、不幸こそはその糧となり情熱の源とならうから。

中條百合子氏、吉屋信子氏、この二人は外遊中であつた。歸朝後の新面容こそはたのしみに考へられる。ささきふさ女史、三宅やす子女史の二人はいづれも定評ある人、ささき氏は隨筆集『或る斷層』といふのを本年出版されてゐる。黄ろい薔薇の花のごときにほひのする好ましいハイカラな隨筆集である。コント風のものを大分書かれてゐる。この人はモダンな人としてモダン味を味ひたい人により多く愛されてゐる人である。

二

私は昭和四年度の婦人文藝界の愉快なる事實として『女人藝術』の業蹟、『火の鳥』の業蹟、『窓』の業蹟について滿腔の同情と快心とを以つて語りたいとおもふ。かういふことこそ女性として批評の筆をとるものの必ずしなければならないし又することを樂しくおもへることでないか。『中央公論』『改造』などにのらなければ男性批評家は決してそのことに觸れはしないのだから。そしてそれは何といつても口惜しいことなのだから。

『女人藝術』――この誌でどういふものが本年載つたかといふと『蒼ざめたる家』(宇野千代氏)『赤』(中本たか子氏)『留置場』(北山常子氏)『ヨネ』(戸田豊子氏)『あの日の出來事』(ささきふさ氏)『鈴蟲の雌』(中本たか子氏)『ドルメンの上の謎』(松井締子氏)『黒い戀』(高群逸枝氏)『點る』(八木秋子氏)『二つの道』(戸川靜子氏)『聖母のゐる黄昏』(太田洋子氏)『乳を賣る』(松田解子氏)『嘆く』(高橋鈴子氏)等で、アナアキスト、コンミニストの若い作家がその大凡をしめてゐて、何れも新進の人々である。(高群、宇野、ささき三氏例外)松田解子、松井締子、八木秋子、戸田豊子、戸川靜子、高橋鈴子、かういふ人々を、昭和五年の新進作家として廣く世人からみとめし

める日が來ればよいとおもへる。

「火の鳥」――この誌では「鼠」(栗原潔子氏)「怒り」(窪川いね子氏)「秋の客」(辻村とも子氏) 陰性の靜物(中本たか子氏)「わらふ白猫」(小金井素子氏)「七十二番」(山川朱實氏) 其他この雜誌の特色はどこまでも物しづかで、同人雜誌風である。「女人藝術」が表通りのオフイス風なればこの方は橫丁の小間もの店といふ感じ。

「窓」――この誌では白石淸子氏が一人小説を書いてゐる。伊福部氏は評論の方に力をそゝいでゐるのだ。

女人ばかりで作られてゐる以上三つの文藝雜誌以外、奧むめお氏の主宰する「婦人運動」には「健脚家は狂ひと認める方針」といふ變つた題で奕イツ子氏が小説をのせてゐるし他にも「妻」(並木琴子氏)「求職難」(樺山千代氏) 等々がのつてゐる。

十一月號より大きい雜誌にした「婦選」は「新生への道」といふ題のもとに、生田花世、中本たか子といふ順に連作をこゝろみつゝある。

婦人文藝、このことについて今年私は、長い間書きつゞけて來たことをまとめて、「近代日本婦人文藝、女流作家群像」といふ書を年末刊行した。私はこの書に於いて過去の婦人文藝を述べ、明日の婦人文藝を暗示的に語つて見たつもりで、「女流作家と社會改造」なる題目のもとに、婦人文藝家の社會動向についての關心を喚起せずには居られなかつた。そのことをこゝに再びくりかへして見てもよい。男性の形づくつてゐる文壇なるものを問題とせず、女性全體の自覺よりなるところの本質的女流文藝運動は婦人社會改造と兩々相俟つて、意味深き進展をむかへるために、その曙光を示しつつあるのが現在の姿である。私はかういふ立場から「婦人運動」といふ風な雜誌が、やはり每號女人の創作を缺かさないことをのぞんでゐる。

この二三年の社會風潮はこれまでの文壇をねこそげ搖り動かしてゐる觀がある。小説の全集刊行を機として、老大家は彼岸におくられた、在來文壇の特權は、新しき人々の特權のもとに移動されてゆく。然し今日特權はめぐまれる今日の流行の作家も、時代の力におされて、昨日のやうな固定的文壇常識以外にはみ出しつつある。

世をあげて文藝の士は「金もうけ」としての執筆を公言して賣り歩く。藝術至上主義の旗はすでに破れ、又破れずとも

その文藝市場での勢力をすでに弱くしてゐる。なほプロレタリア文藝運動の人々の作でも、それはもはや露骨なる宣煽的効果のみでは幼稚の外の何ものでもないとされて來てゐる。あまねく讀者の待望する小說なるものは、單なる身邊小說でもなければ單なる宣傳小說でもないのである。通俗小說に對しても、批評なしといふわけではない。面白くて、多方面で、見識があつて、立體的でそして社會性もあり、心理描寫もたしかで、スケエルが大きくて、テンポのはやい、病的ではなくて、しかもイージーゴーイングではないといふ風な作品こそは現代讀書家のよみたがつてゐるものなのである。

要するにすべては人の問題である。文藝界に人ありとすべき日にいい文藝は生れ、女流文藝界にこの人ありとみなさるゝ日に將來の大なる女流文藝は見られよう。して、その人となるには、何と多くの叡智と、鋭い觀察と正しいハートとつよい情熱と、これらをみがき上げる勉强との綜合藝術であらねばならぬだらう。實に至難なるは文藝に生きるみちなのだ。だから私たちはその文藝界での幾多の苦難の中へ、おそれるところもなく、女人として飛び込んでゆくかの人々の勇氣― これを十分たゝへよう。

雪に埋れて

菊地久里

十五六年前頃七ツか八ツ頃の一錢玉や、五厘玉を年玉に貰つた正月を思ひ出します。

驅けたりする毎に、腰でチャリ〳〵鳴る銅貨の音が嬉しかつたものです。

北海道のこととて、藁靴をはいて街へ、フーセンを買ひに出かけたところが、フーセン屋の爺さんが、二錢買つた子にばかり、寫し繪の景物をやるのが羨ましくて、巾着の、殘りの一錢を足して、寫し繪を、貰つた事を思ひ出す。

この三四年は家を離れて正月を過したが、どつぷりと雪に埋れてた北海道の、ストーブを圍んで迎える、あの正月氣分は、忘れられません。

婦人運動の實踐題目

高群逸枝



一

今議會の解散は、當然まぬかれがたいとすれば、普選第二の總選擧が、開かれるわけである。かくして、無產者が、政治に對する經驗を深めてゆくことは、種々の意味において、有意義である。處で、今度もまた、いかに總選擧を迎ふべきかといふことが、無產者は勿論、婦人にあつても、それぞれ論じられることとならう。

二

最初の總選擧では、婦選獲得同盟の「婦選を政綱に掲げてゐる候補者に對しては、政黨の如何を問はず、推薦狀の發送及び辯士派遣の方法で應援する」といふ對選擧策が、議論の中心となり、その結果は、大多數者の意向は、該同盟の態度を非として、「婦人を解放するものは無產者である。ゆえに無產者の政黨をこそ、婦人は支持すべきだ」といふことになつた。

然し、こゝに困つたことには、それは「實行」のための指導理論としては、役に立たないものであつた。無產黨は當時勞農、日勞、社民、日農一二の地方政黨といふやうに分れてゐた。そして、その各々が、互に頑として相容れないカタキ同志として、相見えてゐた。だから、實際的に「無產黨」を支持しようとすれば、その何れかの一つを選ぶしかない。こゝで、右の論客達は佇立してしまつた。

三

その後、ブルジョア新聞によつて、口火を切られたかの觀ある無產黨合同論が持ち上り、「無產大衆の火の如き熱望」の名のもとに、それが主張されたが、結果はどうか。その時が四

分五裂なら、今は正に十分二十裂の有様だ。そして、今や我々は再び、「總選擧をいかに迎ふべきか」の問題に突き當つてゐる。我々は再び「婦人は無產黨へ」と論じ、十分二十裂の「無產黨」の前に佇立することを繰返さねばならないか。それとも何でも彼でも「婦人は全無產黨を支持應援すべし」とするか。處で、「全無產黨」なるものは、「愛國無產黨」などをも含む二十數黨で、選擧までには、まだまだ多くの「旗上げ」をする「無產黨」があるとのことだ。

四

單なる「無產」の名を、無批判的に信じようとする婦人達が、それらの種々の無產黨の前に、呆然と突っ立つことは、ごく當りまへである。進んでその何れかを選ぶには、何らかの「批判」が要るが、その「批判」がないとすれば、折角の總選擧だが、又々佇立のほかはあるまい。そして、その受難によつて、再び「無產合同說」に共鳴するであらうことも前回の通りであるとすれば、かくて「又々」と「再び」との繰返しが、第三次、第四次の總選擧にも同じやうにつきまとふのでなければ幸だとするほかはない。

五

合同——それは可能であるか。可能なりとせば、いかなる形においてであるか、といふことを、何よりも我々は考へて見なければならない。

無產黨なるものが、單一の形において發生、成長するのは無產者に政治的經驗なく、從つて政治的指導意識の分裂を見ない原始的の場合であることを通例とする。イギリスにおける勞働黨の如く、文字通り「勞働者の政黨」なる素朴的の意識によつて發生し、成長した場合とか、ドイツにおける社民黨の如く、マルクス（ラッサレーを克服して）を唯一の思想として成長した場合等にあつては、比較的長く單一黨的の狀態を保つことが出來る。

が、その後世界の無產黨は、その可なり長い政治的經驗によつて、指導意識の上に、散々な分裂をきたしてゐる。ゆえに後進國にあつては、あるひはロシヤのボルセビキを、またはイギリスの勞働黨を、ドイツの社民黨またはドイツ共產黨を、オーストリヤのそれを、更に溯つてラッサレーを、といふやうに、あらゆる經驗と指導意識とを受け入れるのは必然で、そこに卽ち多くの「無產黨」の分立を見るのである。

六

かゝる分立は、いかにして統一がなされるか。「國情」によつてといふことが、一般にいはれてゐる。然し、政治における國情なるものは、主として支配勢力のそれを意味するから早くいへばそれへの「妥協」によつてといふことになるのだ。事實、無産黨は「妥協」への道を取りつゝある。この「妥協」への道の最初にあつては、それを非とする純理論が、力を失はず、相當の期間、それに抗する。ゆゑに、その結果この期間に（たとへば現在がそれだ）無産黨は再び盛んに分立するが、この分立は長くは續かない。

七

かくて、現在のやうな對等的の分立狀態は、優劣的のそれに置きかへられる。そして優者と劣者との差は、一選擧ごとに大きくなる。その頃になつて、始めてわが婦人佇立家諸君は、その據るべき大政黨（國情的の）を發見するであらう。

だが（許せ暫らく）、一方組合運動の發展は（いやいやながらも、遂に近く組合法を發布しなければならなくなつたことは、組合運動の底力を物語るものである）、それらの國情的の政治運動に代つて、注目を惹くべき狀態に置きかへられて行く。そしてそれと政黨との衝突が深められ（現在にあつても、組合運動がいかに政黨によつて踏み散らされつゝあるか）、分離への行進曲を奏で始める。そこにおいて俄然、無産者の運動は組合運動に集中する。

かくて、「無産者こそ婦人を解放する。ゆゑに婦人は無産運動を支持しなければならない」として、その「政治運動」に注意し始めた婦人達は、長い佇立の期間を過ぎて、いざといふ時になると、すでに社會の事情は變つてゐて、眞の無産運動はその「經濟運動」にあることになつてゐる。かくて、かうした御婦人連は、いつも堂々廻りをしてゐなければならない。

八

それらの見透しをもつものは、「現在」を確實に生きることができる。實に我々にとつて必要なのは、「將來の社會はどうなるか」ではなくて、「現在いかに生くべきか」にある。それらの婦人が、手をつかねて分裂せる無産黨の前に佇立することは、彼女達自身にとつても、望ましい生方ではないのだ。

然らばいかにすべきか。私はそれを四つに分けて說いて見よう。

第一のそれは、明確に政治主義の立場を取ることである。さうであれば、それらの人々は、まづその手段としての「政

權」をかくとくするために、一路邁進するであらう。「政權」なしには政治は考へられない。ゆゑに、何はさておいても、それに第一段の目的を集中する。この運動にある人々は、いかにも實行的にはつきりしてゐる。目的が常に一事に集中せられてゐる。實行運動の秘訣は、この「目的集中」にある。かくてこれらの人々は第一段の目的を達した時、さらに第二段のそれを志す現在あるひは將來「大勢力」たり、又たりうべき政黨に參加して進むことがそれだ。蓋し、「勢力」をほかにしては政治運動はあり得ないからである。かくて此の種類の人々は、個人的にいつても、常に「踏み外づ」さない。やがて婦人代議士であり大臣樣である。然し、大勢力たり得た時、政黨運動は、無產者との隔離をはつきりした形において曝露することを通例とする。ゆゑにそれらの大政黨を目がける婦人達は、現實的（物質的）には惠まれても、理想的（精神的）にはめぐまれない。そこに行つた時、始めてそれらの婦人達は、「大衆の政權かくとく」から始まつた長い間の奮鬪が結局、「少數者の政權かくとく」――即ち大臣的地位のかくとくを意味するものでしかなかつたことを知るのだ。そしてそれが即ち「政治主義」のほんとうの姿であることを。

第二のそれは、現在分裂せる無產黨の何れかへ、氣まぐれにか、それに近い動機において、入つて行くことである。勞農黨であれ、社民黨であれ、大衆黨であれ、愛國無產黨であれ、何んであれ構はない。そして入つた後は、人のやるやうにやつてゐればいゝ。そしてそれによつて「實行」慾を滿すがいゝ。「自分は書齋でのやかましい議論は不得手だ。默々と實行するのだ」といふことが、この種類の人によつて最も多くいはれる。この種類の人は「實行」さへしてゐればいゝのだ。それがいかに反動的のものであらうと構はない。

第三のそれは、政治主義でもなければ、經濟主義でもない、その折衷にある。この立場は最も「實行」に困難である。分裂せる政黨に對して、「合同」せよと叫び、同じく分裂せる組合に對して、それを叫ぶしかない。然し、その叫びは、たとへば、既成政黨に對して、一部の批評家がなした「倫理化」の叫びに似てゐる。その「倫理化」なるものは、必ずしも既成政黨と相容れぬほどの、革命的道德の樹立を期待するものでなく、ブルジョア倫理化にしか過ぎない。從つてその倫理化は必ずしも不可能ではなく思はれる。だが、不可能なのだ。それと同じく、無產黨及び組合の「合同」も、不可能ではなく

思はれる。だが、不可能なのである。結局、「ダラ幹」の倫理化は望まれない。既成政黨を分裂腐敗せしめるものが、その「ダラ幹」どもであるやうに、無産政黨もまたさうである。然し、それが「ダラ幹」そのものゝ個人的の罪であるかといふと。否、原因はもつと深い處にある。組織の罪だ。政治組織のベクロする宿命的の缺陷がこれだ。ゆゑに、無産黨の合同は意識的には全然に不可能であり、自然的の勢力歸趨に俟つしかない。況んや組合の合同は、それらの政黨との關係の下にあつては、斷じて不可能であり、その組織も「集權」から「聯合」への移行をほかにしては、それの大團結は不可能である。わが國では大戰後組合運動の擡頭時代に、その組織の問題が盛んに議論され、大正十一年九月大阪における日本勞働組合聯合創立大會で、水沼辰夫氏等「聯合」派と、鈴木文治氏等「集權」派とが決裂し、その後ブルジョアによつて與へられた普選を機緣とする政治運動の勃興につれて、集權派の横行となつたが、その結果はどうか。組合は現在見るやうな散々な分裂(政黨よりももつと甚だしい)をきたしてゐる。ゆゑに爭議は振はず、勞働者の威力は見くびられてゐる。たまたまの爭議にしても、政黨とか、組合幹部(集權派の特徵)の野心が、それに作用してゐることが、その爭議を不純にし、弱めるのである。

合同といふことは、かく何れの場合にあつても、現在のまゝでは不可能なのだが、それを可能かの如く叫び續けねばならない立場に、折衷論者は置かれてゐるのである。かくて彼等は、一個の政綱を掲げて、政治運動を開始することも、または一の經濟運動(消費組合をも含む)に突き進むこともできない。目的が(現在の實行運動を指導すべき)定まらず、あるひは政治的に、または經濟的に浮草的の生活を續けるしかない。これは呪はれた立場だ。勞多くして、酬はれることは少い。然し、常にその面せる社會にあつて、ある程度の交渉(表面的のそれぞれの勢力との)を保つことにのみ、生存の意義を感ずる人々は、この立場をとるしかないであらう。

第四のそれは、明確な經濟主義である。この立場は「無産者の社會は經濟運動の展開によつて出現する」といふ確信に立つてゐる。經濟運動――それは廣汎な種々の運動をもつてゐる。勞働組合運動、消費組合運動、農民組合運動(こゝには小作運動、耕作者運動、協同運動等があり、それらの交響樂は「共産村へ」を奏でてゐる)等があつて、それらの諸運動

は、ごく自然に、建設（新社會の）と破壞（現社會の）を分擔し合つてゐる。歸するところは自治コンミユンの聯合社會であり、經濟諸運動の彼方に必然的に展開する新社會がそれであるとする。

何ゆゑにかゝる認識は生れたか。我々は政治運動とか、政權運動においては、そこに少しの新しい樣式をも、意味をも見出すことは出來ない。それは有史以來の歷代社會を通ずる現象であり、卽ち、それらのすべての「集權」社會における通有のものである。それらの「集權」社會の組織は、獨裁と民主の繰り返しで、スメリヤとかエジプトにおける「祭司」や「パロー」（王）などの獨裁制から、下つてはギリシヤ及びローマの議會政治――卽ち民主制（こゝでは政治を支配するものは王や祭司ではなくて、人民であるとされ、人民の集會における指導者なるものが出現した。）となつたが、それに次いで、アレキサンダーの獨裁制が起り、ローマ法王へと續いた。そして近代民主制となつたが、この近代民主制の特徴は、下層民及び婦人を取入れたことである。それにも拘はらず、此の民主制は、古代のそれがさうであつたやうに、結局、眞の「民主制」ではない。「民主」の名のもとにする支配者政治にしか過ぎない。「獨裁」と五十歩百歩だ。「獨裁」は露骨な支配者政治で、「民主」は欺瞞的のそれでしかないことが分つた。こゝにおいて、眞の「民主」制は、民衆自身の政治卽ち「自治」をおいてほかにない。いかなる名における「獨裁」であらうと、「民主」であらうと、それらはすべて「自治」と相反する惡組織に外ならない。

モルガンの研究では、有史以前の長い期間、人類の社會を組織づけてゐた「自治」制は、多くの自治コンミユンと、それを聯結した同盟があり、同盟協議會があつた。この制度は、その幼稚と單純とに拘はらず驚くべき組織で、軍隊も警察もなく、國王も貴族もなく、裁判所も監獄もなく、それで萬事が秩序よく運んでゐる、この共產社會には貧者と奴隷があり得ない。彼等野蠻人は、この制度の下において、極めて公正なる、極めて威嚴ある、勇敢なる人格を發現させた。（堺利彥氏記述による）

かくて我々の目がける社會が、新しき意味における「自治共產社會」であり、その世界的聯合であるべきことは、有史以來の長い「集權政治」社會に虐げられ、それに幻滅した我々のごく自然的の希望であり、自覺であるべきだが、然らばそ

の社會は、いかにして我々の眼前に展けきたるであらうか。「意識」こそは確實な豫言者であるといはれる。我々の「意識」の上に、「政治」が疑はれ始め、「自治」が望まれだしたのは、ごく近世のことであるが、それ以來人々の注意はこの一事に集中された。人々は即ち、「いかにして政治社會は出現したか」また「いかにして自治社會は來るべきか」といふことを空想的に、科學的に、その他種々の方法によつて研究しだした。その研究は區々であるが、兎もあれ人類が「政治社會」を否定し始め、「自治社會」を求めだしたといふ一事は確實である。人類の「意識」の上に現はれた此の共通の事實は、然らば何を物語るものであるか。曰く「意識」こそは「豫言者」である。即ち「政治社會」が廢止され、「自治社會」が來るべきことの豫言だ。「意識」は目に見えないあらゆる社會條件からの產物である。が故に、それは逸早く、そして正しく目に見えない社會條件を反映する。即ち明確な豫言者である所以は此の意味からである。

　さて、それで、來るべき我々の社會が必然的に「自治」社會であるべきことは豫想されるが、然らばその社會はいかにして來るべきか。

歴代の民衆は、その面してゐる社會を改造せんとして、常に政治運動若くは政權獲得運動を行つてきた。古代の歴史を研究するものは、ローマにおいて、または支那（最も野蠻と稱せられる蒙古地方）においてさへも、名もなき露店商人とか、農夫とかの階級、即ち平民階級が、貴族及び武士の特權を克服して、平等の政權を得ようとして奮鬪し、そして遂にその希望を個人的にではなく、社會的の役において遂してゐる事實を發見するであらう。その如く、遠い古代から、民衆は常に「政權」によつて自由を得るといふ夢を抱いてゐた。そしてそのための運動が即ち「民衆のもつ唯一の運動」として繰り返へされてきた。

　處が、ごく近代、即ち民衆の意識の上に「自治」社會が望まれ始めたのと前後して、突如、風變りな「民衆運動」が發生してきた。それは即ち「勞働組合運動」であり、「消費組合運動」であつた。いづれも無智な勞働者の生活の中から必然的に生れたもので、初めは非常に微力なものであつたのだが、一世紀の間に驚くべき成長を遂げ、そして遂げつゝある「勞働組合運動」は絶大な破壞力をもつてゐる。最近の僅々數個の車庫よりなる「市電爭議」ですら、斷然都市からは「文明」を、市

民からは足を奪つたではないか。一方「消費組合」は絶大な建設力をもつといはれる。これは有史以來の政治社會の特産物として發展し來つた「商業」を絶滅し、「自給自足」の「自治社會」を豫想するものであるが、特にこれが「農民」の中に取り入れられた時、我々は茲にまた一つの風變りの「民衆運動」を發見するのである。即ち「農民運動」の名を以て總稱される運動がこれで、食物及びあらゆる原生産者としての農民は、土地及びその他の生産機關、金融機關等の共有と、右の消費組合、その他との完全な合體を目的とする「協同組合運動」によつて、商人階級（資本家階級）及びその巣窟たる都市を漸次的に絶緣し、その究極にあつては、村落を共産化し、それの世界的聯合を目がけるのである。工業は都市的即ち營利のための工業から、農村的即ち生存のための工業に移行する。然し、かくの如き大事業は、單なる「農民」のみによつてはなし得られない。都市に勞働者があつて勞働運動によつて戰ひ、家庭に婦人があつて消費運動を起す等、これらの分散的の經濟諸運動が、その結果において、革命を交響するのであり、總合するのである。ゆゑに農民も勞働者も、婦人も、その他のものも、こゝでは同じき價値において評價され、相提携して、それぞれの分野にあつて戰ふのである。ゆゑに事務所その他に自由職業者があり、書齋に知識者がある時、自由職業者はそれ自身の組合運動をもち、知識者は「書き」「説く」等の、「それ自ら」に與へられた眞に必然な、可能な、有能な方法によつて戰ふことが、それ自身の立場からする革命への唯一のそして最も有力な「實行運動」なることが理解される。かゝる運動にあつては、すべての者が、一人殘らず同じ價値における戰士であり、ごく自然にそれぞれの分野を分擔し合つてゐる。あるひは集團的に、あるひは個人的に。

だが、それらのすべてのものは、經濟運動においてのみ新社會の展開することを強く確信する意識において一致する所の「同一根據」をもち、また來るべき我々の社會は。自治コンミユンの聯合社會であるとする「同一目標」をもつのである。ゆゑにその現實における「實行」運動は、自治意識に貫かれた所の經濟運動（種々の立場と種類における）でけなければならない。勞働者は勞働組合運動から政治運動を追放することによつて、理想的にも現實的にもその運動を圓滑ならしめ、婦人消費組合等もまたさうでなくてはならない。また俸給者組合にしろ、自由勞働者組合にしろ、同じくさうであり、農民に

おいても無論である。我々に與へられた道はかくの如く簡明である。即ち政治支配及びそれの意識を否定すること（殖民地及び水平社運動等においてはこの意味の强き集團的鬪爭が見られる）と、それぞれの立場における經濟運動に從ふことである。そして吾人は意識の宣傳及び文化の建設に關する使命のために戰ふのである。

かくて、それぞれの集團及び個人が、それぞれの部署につき、同一根據と同一目標によつて戰ふ「經濟運動」こそ、即ち勝利への運動である。

九

わたくしは以上において、婦人の關係する運動における四つの實踐題目を批判してきた。その何れを取るかは、各自の自由であるとしよう。たゞ此れだけのことは云へる。各自が今日、種々の認識と方法を取らうとも、社會の動きは、結局たゞ一途しかない。それは最初から決定されてあることであるし、また各自の散々な盲動（許せ）が行はれるとしても、それすらも、結果から見る時においては、何等かの意味において、社會の進展に資するものであらう。と。

ブラウニングではないが、「天下のこと皆正し」である。たゞ、それらの散々な盲動は、それ自身において、屢々無知の苦しみと、錯誤の受難を味はねばならない。—完—



（婦選大示威演說會に於けるハーディ氏）

たちまち三萬の同志

イギリスの婦人參政權獲得のために最も勇敢にたゝかつたこの婦人社會政治同盟は、一九〇三年に創立されたものであるがそれまでの參政權運動者の多くか有閑階級

街頭に吼ゆる婦人の群

これは少し古い記錄に屬するが（一九一一年）イギリスの婦人が未だ參政權をもつてゐなかつた頃、それを要求して一大示威運動を行つた。その光景を目のあたり見られた長谷川如是閑より特に拜借して轉載するものである。

いよ〳〵一萬有餘の婦人參政權運動者が大々的な示威運動をするといふ場合に立ち至つた。

熱心な運動の結果、今度の議會には婦人參政權について色々の議案が、名方面の代議士に依つて提出されたが、その中で、男子の場合よりも少しばかり差別をつけて女子にも參政權を與へやうとするシヤツクルトン案といふのが最も有望らしいといふのでその案を通過させるために、女權運動初まつて以來の大仕掛けなデモンストレーションを、六月十八日に行はうといふことになつたのであつた。

行列は議事堂から少し下のヴヰクトリア堤に集つて、六時三十分に出發、ケンシントンに向ふといふ。目的地たる南ケンシントンのアルバート・ホールは一萬人からを容れることの出來る大會堂であるが、その近くに來ると見物人が垣を築いて向ふ側のケンシントン・ガーデンスの鐵柵にもひし〳〵と見物人がからみついてゐる。

の夫人や令嬢であつたのに反して、この團體には婦人勞働者が多くつねに社會主義的な傾向をもつて無産者の味方として働いた。

　この團體は成立してまもなく猛烈な運動を初めた。五ヶ年の間に五萬回の集會をし運動費として十萬ポンド(約百萬圓)の寄附をうけた。その機關紙「婦人參政權」はたちまち三萬の讀者をえたと云はれてゐる。

サフラゼットの意味

　當時イギリスでは同じ參政權運動者を二つに區別して呼ぶやうになつた。一つはサフラジスト (Suffragists)今一つはサフラゼット (Suffragets)

　サフラジストとは合法的におんけんに參政權を與へられやうとする團體であり、サフラゼットとは、大人しくしてゐては何時まで經つてもラチが明かぬといふところから戰鬪的に出た一派を云ふ。參政權をくれないやうな國家に對して納税をすることはいらぬ。そんな國の法律に從ふ必要がない、と非合法的に勇敢に婦人の權利を追及してやまぬのであつた。

アルバート親王記念碑の石階は人で埋もつて、正方形の人間の山が出來上つてゐる。

　ハイドパーク・コーナーをすぎて右手にグリーン公園のコンスチユーシロン丘を見下すピカデリーの外れに來ると二十間もある廣い往來が、僅かに行列を通す二三間の通路を殘して人で一杯である。自動車もことごとく立往生といふ鹽梅であつた。

　ちやうどこの時、向ふから行列の先頭がやつて來た。

×

　行列の先頭は、三人の馬に乘つて婦人だ。いづれも男子同樣の乘り方をしてゐるがその内の一人は、草色の乘馬服を着て山高帽を被つて手には、獵に使ふ杖を持つてゐる。これがドラモンド夫人と云つてウイメンス・ソシアル・エンド・ポリチカル・ユニオン(婦人社會政治同盟)といふ團體の幹事の一人で今日の示威運動の總指揮官である。そのまわりに數名の乘馬巡査が附添つてゐる。つゞいて紫と色と綠の三色旗が來る。これこそ團體旗で、その次には婦人の樂隊が紫地に綠色を取合せた派手な服裝をして活潑なマーチ(進行曲)を奏しながら進んで來る。

　つゞいて幽靈のやうなまつ白い服裝をした一隊の婦人が、矢の根に型どつて銀色の三角形のついた長い杖を高くさゝげて數丁に亘つて長々とつゞく。その中程に、高く張つた幕を立て妙な女の姿を描いて、

「監獄から市民に」

サフラゼットは婦人參政權反對の政治家の演説を妨害してしやべらせぬ。面會を強要する。劇場へゆけばそこへ火を放つ。示威運動をする。法にふれて獄へゆけば與へられた食をとらずに絶食同盟をする。

示威の標語

その示威運動に七千本の旗が押したてられた。いろ〳〵な文句が書かれてある。曰く、

「代表者をもたない婦人に税を課するのは虐政である」
「意志ある所には必ず手段あり」
「運命は勇敢な者に幸ひする」
「これを爲すは、なされるのを待つよりは遙かに勝る」
「われ等に冠するものは爭鬪に非ずして目的である」

もつと不穏なのに次の如きものが。

「一致は力なり、自由のために敢て行へ」
「不法あるが故に謀叛あり」
「もし、革命が必要ならば、革命！」

又、婦人官吏の幕には、

「國家の公職にある者は、同一樣に支拂は

と大書してある、これを擔いで進む。いはゆるパンナーといふ、日本なら旗旒といふ所である。これは運動のために監獄に入つた婦人らであつて、總勢六百七十人居るといふ。觀衆の婦人の中にはしきりにハンカチを振る者がある。見れば可なりの老人もあるが妙齡の婦人もある。參政權運動者にでもなるより外仕方あるまいと思はれるやうな豪の者も多いが、中には、一顰自由黨を惱殺し、一笑保守黨を傾けるやうなえうてうたる美人もある。

その中程に澤山の囚人の名を記した幕印をかついでゆく。これは獄中で絶食同盟を企てゝ、喞筒で強制的に食物をとらせられてゐた連中である。

數百の白衣の婦人が、件の銀の矢の根を捧げてゆく。これが夕日に映じてキラ〳〵と燦めく工合はギリシアの神話にでもありさうな光景で一種悽愴な印象を見る者に與へる。これには騷ぎ立つてゐた群衆もちよつと鳴りを鎭めた。しきりにハンカチで目を拭いてゐる女もある。

×

この一隊を先導として間々に樂隊をおいて、幕印にはケンシントンとか、ハムマスミスとか、チエルシーとか、一々その地方の名を現はし、又思ひ〳〵の趣向をこらした繪畫や文句が描き出されてある。行列はみな、白衣に綠の章を肩から胸にかけた婦人が指揮して、五六人宛の縱列を作つて音樂に歩調を合せて、まるで軍隊の行進のやうに秩序整然と進んでゆくのである。これが俄かに八方から集つた一時的な群衆の行列なのであるから驚くでないか。



（中央四角デモンストレーションの標語）

れ、同一樣に待遇せらるべし」

アニー・ケーニ

彼女は熱心な婦選の闘士であつた。

一九〇五年グレー卿が、自由黨內閣成らんとするとき堂々と所信をのべて「われら

警官は、全く行列指揮官の女の命令に從つて行列を指揮してゐる。指揮官が手をあげて停止の號令をすると、巡査がそれからそれへと手を擧げて命令を取次いで傳へる。さきの乘馬の婦人らが指揮杖を振つて警部を指揮してゐる樣子は中々振つたものだつた。ちよつと杖を擧げて警部を呼ぶと、警部は婦人の乘つてゐる馬の口に取次いで恭々しく命令を承つてこれを巡査に傳へる。警官が民衆の示威運動の指揮官になりすましてゐるなどいふのは日本などでは到底見られぬ圖であらう。

やがて黑いふちを取つた眞赤なロープを着て菱形の帽子をかぶつた大學卒業生の一隊がつゞく。盛んに歡呼してゐた隣りの婦人は余に向つて、いかにも自慢らしく、

「ごらんなさい、大學卒業生です。あの人たちは皆科學者か藝術家か醫師か、とにかく立派な高い教養ある國民です、何故あんな立派な人たちに被選擧權がないでせう」

と力み出した。

この女學生の次には「ケンブリヂ大學女子選擧權男子同盟」と書いた幕を掲げてやつて來たが、其の下には赤いロープの男子が五六人しかゐなかつたのは看板の割には淋しい。

やがてＷＦＬと金文字彩かに書いた三角の小旗をめい〳〵に捧げた一隊が數丁に亘つてつゞく。これは「婦人自由同盟」と稱して「婦人社會政治同盟」と双ん

は國民の信頼に依つて自由黨の所信を實行せむ」と演説をしてゐるときに、起つて、「婦人の政治的自由について自由黨はどんな方法で起たうとするのか」と質問して、動かなかつたのは彼女であつた。

十年間女工として慘めな生活をつゞけて來たケニーである。勞働組合所屬の萬の女工を代表して、全勞働婦人の幸福のために自由黨の成閣は婦人に投票權を與へるや否やとつめ寄つて遂に投獄せられた。

いよ〳〵開かれやうとしてゐる五十八議會は解散うたがひなしといふでありませんか。民政黨はいふに及ばず政友會も中立も無產黨も選擧對策にとりかたまつていろ〳〵畫策中であります。

解散があつたり、總選擧があつたりしては、また政界は婦人公民權どころではないでありませう。

選擧になつて政權屋がばつこし、「民衆のために――」なんて空々しい口約をくり返し乍ら、その實卑しむべき自分の政權慾利權慾を充たさうとして秘かに牙をといでゐるやうな連中が横行すること、天下の恒例になつてゐるのですが、私たちは未だ公民

で勢力のある團體で、けふは別に會合を開く筈だが行列だけを聯合で行つたのであつた。

×

パレツトに花を飾つたのを手にしてゐる女美術家の一隊が來る。派手な姿で白粉をつけて、頬や目のふちを櫻色に染めた女役者の一隊が手に〳〵ばらの花や綠葉を翳して進む。見物は無性にうれしがつて歡呼わくが如し。

「ロンドンカウンテイー・カウンシル女敎員」と書いた幕章の一隊が來る。「女子體育教師」と書いた一隊も來る。病院の看護婦が職業服のまゝで練つて來る。ロンドンの看護婦は中々嚴重な選拔の結果資格を與へられるので堂々たる淑女が多いといふことを兼ねて聞いてゐたが、見た所もいかにも立派な風采のものが多く見物人も眞面目に歡迎して惡く冷かすものはない。

女官吏も堂々と看板を掲げて加つて來る。女文士の一隊が來る。中には著名な小説家もありて、あれが誰れだ、彼れだと指さしてゐる者もあつた。書記、速記者、タイピスト、保姆、店員といつた風な女も續々職業服のまゝで次ぐ。

まつ白な衣服に黃色い帽子を被つた十二三から十七八人才位の小供の一隊は殊に同情をひいたが、其の中程に、白布を掩ふ車を二頭の白馬に曳かせてその上に、青い獄衣を着た婦人をまん中に座らせ、周圍にも同じくギリシヤ風の白衣を着た子供をたせ、馬の口を二人の少女が持つてゐる。この馬車は行列の中の秀逸であつた。まん中の婦人はホウエイ孃と云つて數十年を婦人參政權運動のために

權をもたずとも、直接私たちの生活を支配する政治を、かういふ餓鬼どもに委せないやうに、可能な方法で追出し策を講じなければなりません。

　無産政黨が、どれも最もらしい政綱政策を掲げて大多數の民衆の共鳴をかちえてゐるのですが、民衆の利益には直接の何ら關係がなさゝうな感情問題や行き掛りや何かで分裂また分裂を重ねて、全く就くべき所を知らずといつた有樣でありますが、かうしてさんざ踏みにぢられてゆく民衆の日常利害擁護のために、また私たちは公民權をもたずとも出來るだけ内部的抗爭をつゞけなければならぬと思ひます。現在の無産政黨が五つにも、六つにも十にも分れて醜い喧嘩をしてゐるからと云つて、つねに無産政黨はあんなものだと、サヂを投げてしまつては不可ません。又、少數の幹部級野心家の分裂に追隨して、直接に無關係な女の私たちまでが戰線を分裂させて力を殺ぐことは愚かなことであります。

　又、婦人公民權をもたなければ、婦人としての私たちの問題は一切どうすることも出來ないなど考へるのは大變な間違ひであつて、むしろ私たちは、毎日の生活で直接にぶつつかつてゐる問題の一つ一つを、つねに共同一致して解決の道を圖り政治を支配するところまでゆかなければならぬと思ひます。

獄中に閉されてゐた婦人だといふのである。

　中に英領各地の應援者の行列があつたが、ニュージーランド、オーストリア等の連中は、

「われらは選擧權を有す」

　と書いた章を高く掲げて、本國の婦人を昂奮させんとでもするかのやうに揚々と進んでゆくのは人目を引いた。

×

　いつまで見て居ても行列が果てさうになかつた。樂隊ばかりが四十組ゆもあつて、かついでゆく幕章の數が七千本、行列の長さは二哩以上にわたるといふのであるから夜の九時すぎにならなければ全部アルバート・ホールに入ることは出來ぬであらう。

　行列の目的地たるアルバート・ホールの邊に來ると漸く半分ほどは着いたやうであるが早や日は暮れた。總指揮官のドラモンド孃は馬上に杖を振つて警官を指揮しながら行列をだん〱とホールの内に進めてゐる。こゝでは幾組の樂隊が折重つて吹奏してゐるので耳も聾するばかりである。

　往來は一杯の人混みで一歩も進めないのであと戻りして裏通りに出で、南ケンシントンの停車場のそばの料理店に入ると、行列に加つた白裝束の婦人たちで滿員である。いづれもビールの大杯を手にして且つ仰ぎ且つ論じてゐる。妙齡の女の細腕ではもち上りさうにもない大コップに顏を秘すやうにしてグーツと一氣に飲みほしてゐる光景は一萬人の行列よりももつと凄じいデモンストレーションであつた。



月を掘つた男の話

丹野てい子

むかし〳〵、おほむかし、一人の男が、地面を掘つてゐた。男は、地面の表面ばつかり掘るのでは満足出來なかつた。彼は、地面の、奥の奥まで掘つて行つた。

突然、男は、穴の奥の方に、すべ〳〵した銀色のものを見つけた。とりあげて見ると、それはまあるい、光つたものであつた。男は、珍しいものを掘りあてたので、嬉しくてたまらず、近處の人たちにも見せて自慢したいと思つて、高い木の梢に、それを懸けておいた。

ところが、驚いたことには、それは、木に懸けられると、見る間に大きくなつて行つた。ぐん〳〵、ぐん〳〵大きくなつて行つた。

男は、それを見ると、ます〳〵得意になつて、思はず、大きな聲で叫んだ。

「おーい、みんな、出て見ろ。俺は生きものを、地面の底から掘り出したぞ。あれは、今に、とてつもない、美しい女に化けるよ。そうしたら俺は、それと婚禮をするんだ。」

こんなことを言つて、男は、その銀の寶物を、海邊へ持つて行つて洗つた。それから、また、それをみんなに見せようと思つて、木の枝に懸けた。それは、ます〳〵大き

くなり、おまけに近處の人たちが、とても、見てなぞゐられないほど、ぎら〳〵、ぎら〳〵光つて來た。

男は、もう一度、それを、海邊へ持つて行つて洗はうと思ひ、木の枝から下したが、それは、とても、兩手で抱へてはゐられないほど、大きくなつて來た。それに、奇妙に輕くなつて行つて、ぐん〳〵、ぐん〳〵、空中へ上つて行く。兩手でおさへてゐる男の身體まで一所につりあげられて、とう〳〵しまひには、男の足が、地べたから浮きあがるほどになつて來た。そこで、男は、思はず手を離してしまつた。

それは、づん〳〵、づん〳〵空中へ上つて行つた。雲を透して、それの光りが、きら〳〵と地びたへ落ちて來た。

その光つたものは、見えなくなるほど遠くまでは、上りはしなかつた。たゞ、空の上の方にとまつて、そこから、びつくり仰天してゐる人々の顏を見下してゐた。暫くすると、澄み切つた美しい聲が光りをいつぱい湛えた雲の奥から聞えて來た。その聲は、少し怒つてゐるやうな調子でもあつた。

「あゝ、そこにゐる男！　お前は、なんだつて私を地面から掘じくり出したのだね。私は、本當は、もつと、何年も〳〵地の底へ埋つてゐなければならなかつたのに。私は生れるにはまだ早すぎた。お蔭で、私は、もう完全にいつも同じやうに輝くことは出來なくなつてしまつた。私は、毎日毎日、自分の光りを、少しづつ變へて行かなければならない。」

かう言つて、その聲は、だん〳〵、だん〳〵微かになつたそして月は、地平線の彼方へ漂ひ、やがて、波の底へ沈んでしまつた。

人々はそれを見てゐて、ひどく、怖がつたが、その男ばかりは平氣で、こんな事を、みんなに話した。

「ほら、俺がお前たちに言つたとほり、地の底から掘り出した俺の寶物は、たしかに生きてゐたじやあないか。おまけに、これも、俺が言つたとほり、女だつたらうが。俺は、あの女を探すんだ。どんな世界のはてにゐたつて、たしかに見つけ出してやる。」

さて、こんな事があつてから暫くたつて男は、森へ狩りに行つた。ある大きな美しい池のほとりまでくると、犬が、ひどく吠えたてた。見れば、その池に、その男が今までに見たこともない美しい女が、浴みをしてゐるではないか。

その女は、眩いほどに色が白かつた。髮の毛は金色だつた。そして、池の岸には、草色の着物がぬぎすてゝあつた。

「あゝ、この女こそ、俺が長い間探してゐた女なのだ、と、男は思つた。そして、その草色の着物の上に坐りこんで、待つてゐた。

犬は、つゞけざまに、吠えてゐた。女は、犬の聲に眼を上げて、二人の男が、自分の着物の上に坐つてゐるのを見つけた。

「貴方は、何をしてゐるの？」

「それに、貴方は、人間の男じやありませんか？」と、その女は聞いた。

「さうです。私は人間です。私は長い間、貴方を探してゐた。そして、とう／＼、今、見つけることが出來ました。これからはもう貴方は、生涯私のものです。」

「生涯ですつて？ まあ、私は月ですよ。貴方はたゞの人間じやありませんか。それだのに、貴方は、私の着物に觸つた。だから、貴下はその罰で死ななくちやあなりません。ほら、貴方は、私の草色の着物の上に坐つてゐる。退いて下さい。」

かう言ひながら、女は、はじめて、男の顔をじつと見た。

「おゝ、私は、たしかに貴方を見たことがあります。貴方は、地の底から私を掘り出した男です。その時分、私は雲に包まれてゐたので、よくわからなかつた。でも、今、私ははつきりと、貴方を見ることが出來る。たしかに、同じ人です。」

「さうです。たしかに、その男です。私は貴方を探してゐたのです。」

「貴方は、私の着物に觸つた。だから貴方は死ななければなりません。」

「村へ歸つて、近處の人たちにお別れを言つていらつしやい。明日、太陽が沈むまへに、貴方はきつと死んでしまふ。」

男は自分の村へ歸つた。そして、森の池で月の女と會つたことや、女の話したことを近處の人たちに告げた。近處の人たちは、男のために、別れの大饗宴を開いた。

つぎの日、男は、知つてゐる限りの人に、さよならを言つた。そして、太陽の沈む一時間まへに、自分の家へ入り、家の扉をしつかりと閉した。

太陽が、低くなるにつれて、男はしだひに弱つて行つた。そして、陽が、海の彼方に沈むと、彼の魂もともに、去つてしまつた。

月を求めた男は、とう／＼死んでしまつた。（ピレテ島民話）

編物

窪川いね子

通りに面した格子窓から、火花の散つてる仕事場の見える、小さな鍛冶工場の角を曲がると、薄汚ない板塀が續いてゐる。それが××化學工業會社であつた。普通その近所では、紫工場と呼んでゐた。紫色の染料だけを製造する工場である。工場の横のどぶ川は、工場から流れて流れ出る水で、いつもまつ黒な水が溜つてゐた。酢つぱいやうなその藥品の臭ひや、それに近くの石鹼工場から流れ出る水などごつちやになつて異様な臭氣を立てゝゐた。門の柱いつぱいにかけてある木の札は灰色に汚れ、墨で書いた會社の名前は殆ど消えかけてゐた。

紫工場では四十人位の職工のうち、女工は六人位しかゐなかつた。それもたいていは年增のおかみさん連である。それは町工場の故もあつたがまた彼女達の仕事の性質からもきてゐた。仕事は、出來上つたその紫の藥品を袋に入れて包裝するのだが、その前に、塊りになつて出來上るその藥品を粉にくだかなければならない。顏も手も紫色になつて打つ彼女たちの槌の下で、ぼくつ〳〵と音を立てゝ鮮やかに紫色に崩れてゆく。そしてむせるやうな強い藥品の臭氣が彼女たちの顏を蔽ふ。その藥品に慣れないうちは、その毒のために顏が紫色に腫れ上る者もあるのだつた。そのやうな仕事をどうしても娘たちは好まない。

お淸はその中で、たつた一人の娘だつた。彼女は身體の大柄な、髮などいつもかんざし卷きにしたきりであつた。年上の者の中にはさまれてゐるので、多少甘へた氣持ちも見せて、「小母さん〳〵」と、皆の間を氣さくに立ち廻る。それで悧巧者だと言つて、皆の氣受けもよかつた。また、よく働く娘で、夜業などもよく續けた。

紫工場の事務所に、お淸と同じ年頃の、一人の女事務員が

ゐる。如何にも苦勞を知らない女學生上りらしく、矢絣りの着物のよく似合ふ娘だつた。

お淸は何故か、この女事務員にだけはまるつきり近づきのない態度をとつてゐた。晝休みの時間などに、仕事場の前の空地で日向ぼつこなどしながら、おかみさん連はよくこの一人つきりの女事務員に聲をかけた。そんな時傍にゐて、お淸は冷めたい顏つきで、默つたまゝ女事務員をまぢ／＼と見つめてゐるきりであつた。事務所へ用があつて來ても、決してその女には賴まない。男事務員と笑ひながら、てきぱきと話して、さつさと歸つて行つた。二人きりで道で行き逢ふことがあると、女事務員の方で何かおど／＼と彼女の方へ顏を向ける。お淸はそれへも知らん顏をして、ことさらに胸を張つて行き過ぎるのであつた。

ある晝休みの時間であつた。女工たちがいつものやうに仕事場から出て、藥品の入れてある樽などが轉してある空地に日向ぼつこをしてゐた。紫色にまみれた仕事着の彼女たちの姿は、藥品の樽や、黑ずんだ地面の色と一緖になつて、初冬のにぶい陽の光まで黑ずませてゐるやうであつた。

女事務員はおかみさんたちの傍へ來て、編みかけの襟卷を出して編み始めた。

「あら、いゝねえ。」と言つて、おかみさんたちが事務員の手元を覗いた。居眠りをしてゐるおかみさんも眼をあけた。お淸は晝飯の藥罐を事務所へ置いて歸つて來たが、おかみさんの一人が彼女を見て言つた。

「お淸ちやんも編物お習ひよ、松村さんにさ……ちようどいゝぢやないか。」

「よしとくれよ小母さん。編物なんかする暇無いわ。」

さう言ひ放つて、腰掛けの端に向ふをむいて掛けると、彼女は續けて言つた。「そりや、あたいだつて女學校出て、事務員でさ、朝だつて九時に出て來りやいゝんなら、そりや編物も出來るわよ。あたいなんか子供の時から働かなきや食べてゆけないやうな家に生まれたんだもの損だと思つたつて、諦めるより仕方がないぢやないの。編物なんかする暇があるなら夜業するわ。そいでなきや食べてゆけないんだもの。」

お淸はそれだけを一氣に言つてしまふと、冷めたい、强つい顏をして默つてしまつた。

お淸は、自分の苦しい生活の不滿を、手近なものに向けることよりほか、何にもまだ知らない娘であつた。

編輯室にて

和枝

▲新しい意氣込みを以つて、昭和五年をふみ出しませう。

行く手には、あれもこれもと爲し遂げたい計畫が幾つも待つてをります。

皆様に育まれて「婦人運動」も、ここまで伸びてきました。

この成長の裏にある、澤山な個々の力、勵まして下さる方々を思ひますと、もつと〱良くしなければならない、良くしたいといふ熱望に驅られます。

それにつけても、これまで何時も發送が、おくれて、待ち遠い――とのお小言を戴いてばかりゐましたが、せめて新らしい年からは手順よく仕事を、はこんでゆきたい希望でをります。

今月は、いづれもの方が非常に御多忙の最中であつたのにもかかはらず、御執筆下さいまして、誌上にて厚く御禮申上げます。

▲十月號の讀者らんで遠藤さんもお仰言つてをられましたが、實際現代の若い女性たちが、學校から社會に放り出されて眞つ一個の社會の組織分子として、獨立しようとした時何と多くの矛盾や疑問をそこに見出すことでせう。

職業生活を透して私たちは、何を見たか、知つたか。良い、惡いの問題は超越して、自己のおかれた地位や役割をはつきり、見きはめないではおかないでせう。

かくて一歩々々高い意識を獲得してゆく――それは自然の勢です。

單に家庭事情からくる經濟的一補助者としての務めに終始のみでなく、より擴大された視野の收獲あることを忘れてならないと思ひます。

誌代を廿錢に

家庭婦人は消費組合協會へ！職業婦人は職業婦人協會へ！

私たちはきはめて自然のうちに、右のやうに發展し分化しておの〱の會報をもつことが出來ました。

そのために昨秋以來本誌の頁數がそれだけ減少して來たのはやむをえないことでした。然し、紙數は尠く共内容に於て、一層充實したい〱雜誌にしてまみえたい覺悟でをります。どうぞ讀者を倍にふやしてこの仕事を支持して下さいませ。（むめお）

先に痛感することは、社會の動向とはくひ違つたブルジョア教育といふものの、あいまいさです。

× × ×

× × ×

◇誌代はすべて前納にして下さい

前納誌代

壹部　貳拾錢（郵税一錢）
半年分　壹圓二十錢
壹年分　貳圓二十錢

送金法

送金は振替が一番便利です。誌代の受取證は別に出しません。雜誌發送を以てこれに代へます。

昭和四年十二月廿五日納本
昭和五年一月一日發行
東京市牛込區市ヶ谷本村町四
發行編輯兼印刷者　奥むめお
東京市牛込區市ヶ谷本村町四
發行所　職業婦人社
振替東京六四一六〇番

現代ロシヤ三十人集

＝處女出版＝

全三卷　各 價壹圓 送六錢

全三册揃注文特價送共一圓七十錢

プロレタリアの祖國ロシヤの文壇を一望の下に望み得るものは之れだ!!!　現代ロシヤの中堅作家三十人の各傑作一篇宛をとつて此の集を作る元素とした。　とりごりに面白く興味ある讀物、短篇集の持つ獨特の味を遺憾なく示してゐる。

內容、アレキサンダー・マラシユキン「大旋風」ユリイ・テインヤノフ「ザーベル少尉」ヴエラ・インベル「ラ、の利益」マヤコフスキー「紐育」チエフイム・ゾスーリヤ「アクと人間」セルゲイセミヨノフ「奴隷の誕生」ニコライ・テイホーノフ「六トーマン」ミハイル・シヨロホフ「父」アレキサーダー・ネウエロフ「飢餓」アレクセイ・トルストイ「太古の道」、附作者に關するノート。

上卷　新刊

大旋風

中卷　近刊

鎖の歌

イリア・エレンブルグ、フヨドル・グラトコフ、エヌ・エヌ・リアシユコ、マリエツタシヤギニアン、リデア・セイフウリナ、ミハイル・ゾシユチエンコ、フセオロオド・イワノフ、パンテレイイモン・ロマノフ、ヴアレンチン・カタイエフ、ボリス・ピリニアーク、附ロシヤ文壇の大觀。

下卷　續刊

赤い英雄達

デイ・フルマーノフ、ラリサ・ライスナア、ミハイル・フオルコフ、イサーク・バーベル、ウラジミル・リデイン、ヴイアチエスラフ・シシユコフ、アンナ・カラワイエワ、ボリス・パステルナアク、ニコライ・オグニヨフ、イウエゲニー・サムジヤーチン

東京小石川小日向臺町一ノ五一
振替東京三〇四七八
發行所
黎明社

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
昭和四年十二月二十八日 印刷納本
昭和五年一月一日發行（毎月一回・一日發行）

婦人運動 第八卷 第一號 定價廿錢